南島原市文化財調査報告書　第７集

市内遺跡１

２０１３

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

この度、平成22年度から平成23年度にかけて実施した市内遺跡の文化財査報告書を刊行する運びとなりました。

調査は国史跡に指定されている日野江城跡と原城跡の周辺一帯で実施したものであり、確認のための試掘、遺跡範囲確認調査および航空レーザー測量等の調査を行いました。

調査を行った箇所は市の南東部に位置しており、中世から近世初頭にかけて肥前有馬氏が本拠とした地域です。キリスト教の伝来と普及、セミナリヨの設置、天正遣欧少年使節の派遣事業、また島原天草一揆など、地域史はもとより日本史の視点においても非常に重要な出来事のあった土地です。有馬氏が居城とした二つの城跡については、これまで史跡整備事業等に伴って主要箇所の発掘調査を実施しておりますが、その周辺に対しては殆ど調査が及んでおりませんでした。城跡周辺の調査も併行して進めることで、当時の地域の様相がより明らかとなり、城跡を歴史的に評価するうえでも助けとなることから必須なものと言えるでしょう。調査の対象範囲が非常に広く、全体的に調査を進めていくにはまだまだ時間がかかりますが、ひとまず着手し断片的なりとも新たな情報が得られたことは一定の成果であったものと感じております。

歴史的に大変重要であり、もとより市の内外を問わず歴史的な関心の集まる地域でありますが、現在、長崎県と熊本県および本市を含む関係市町が世界文化遺産への登録を推進している『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』に日野江城跡および原城跡も構成資産候補として含まれていることから、近年さらに注目が集まっていると感じられます。ささやかながら本書が、当地域の歴史を理解するうえでの助けとなり、また幅広くご活用頂ければ幸甚の極みであります。

末筆ではございますが、調査に際して御指導を頂いた関係各位、作業に従事して頂いた方々に厚く御礼を申し上げるとともに、皆様の益々のご健勝を祈念申し上げ、発刊のご挨拶とさせて頂きます。

平成25年３月29日

南島原市教育委員会

教育長　定方　郁夫

例　　言

・本書は平成22～23年度に国庫補助事業で実施した市内遺跡発掘調査等の文化財調査報告書である。
・本書に係る調査は南島原市教育委員会が行った。
・調査は国史跡である日野江城跡と原城跡の周辺地において、学術目的の試掘調査、遺跡範囲確認調査および測量調査として実施したものである。
・調査体制は次のとおりである。

南島原市教育委員会　教　育　長　定方　郁夫
教育次長　水島　文昌
文化財課長　松本　慎二
文化財課主査　伊藤　健司
文化財調査員　峰松　朝之（平成22年度）

・本書に係る調査、整理作業および執筆・編集は伊藤が担当した。
・本書の作成に係る出土遺物の整理、図面の製図等について壹岐美由紀・法村瑠美の協力を得た。
・出土遺物・図面・写真等は南島原市原城文化センターに保管している。
・航空レーザー測量および空中写真測量についてアジア航測株式会社長崎営業所に業務を委託した。
・本書における方位は真北、磁北を併用している。
・現地調査に際して次の方々に指導、助言を頂いた。
文化庁文化財部記念物課、長崎県教育庁学芸文化課、長崎県知事公室世界遺産登録推進室、高瀬要一、玉井哲雄、千田嘉博、宮武正澄（順不同、敬称略）

本文目次

発刊にあたって
例言
第１章　調査に至る経緯……1

第２章　地理的・歴史的環境……2

第３章　発掘調査……4
　第１節　調査地点……4
　第２節　調査……5
　　１．日野江町遺跡（試掘調査）……5
　　２．日野江城跡曲輪12（試掘調査）……13
　　３．日野江城城下地区遺跡（範囲確認調査）……16
　　４．日野江城二ノ丸北側地点（試掘調査）……18
　　５．幕府軍陣跡推定地（試掘調査）……27

第４章　測量調査……34
　第１節　調査対象地域の概要と目的……34
　第２節　航空レーザー測量……35
　第３節　空中写真測量……40
　第４節　測量成果の比較……40

第５章　総　　括……46
報告書抄録
付図（測量図データ CD-R）

挿図目次

第１図　調査対象地の位置……1
第２図　調査地周辺の主な遺跡（S＝1/40,000）……3
第３図　調査地点の位置（S＝1/25,000）……4
第４図　調査区の位置（S＝1/2,500）……5
第５図　正保二年（1645）『高力摂津守領分図』（関係部分に一部加筆）……5
第６図　トレンチ１土層図（S＝1/40）……6
第７図　トレンチ２遺構配置図・土層図（S＝1/40）……7
第８図　SK－01出土遺物（S＝1/3）……8
第９図　SK－02出土遺物（S＝1/3）……8
第10図　SK－03出土遺物（S＝1/3）……8
第11図　遺構外出土遺物（S＝1/3）……9
第12図　調査区の位置（S＝1/2,500）……13
第13図　トレンチ配置図（S＝1/500）……13
第14図　調査区土層図（S＝1/50）……14
第15図　周知の遺跡範囲（S＝1/25,000）……16
第16図　調査区の位置（S＝1/2,500）……16
第17図　調査区土層図（S＝1/50）……17
第18図　調査区の位置（S＝1/2,500）……18
第19図　遺構等配置図（S＝1/100）……19
第20図　トレンチ５　調査区平面図・土層図（S＝1/40）……20
第21図　トレンチ７　調査区平面図・土層図（S＝1/40）……21
第22図　トレンチ８　調査区平面図・土層図（S＝1/40）……22
第23図　トレンチ９　調査区平面図・土層図（S＝1/40）……23
第24図　出土遺物（S＝1/3）……24
第25図　調査区の位置（S＝1/2,500）……27
第26図　『原之城御陳取』……28
第27図　A地点「御陣取」より……29
第28図　B地点「御陣取」より……29
第29図　C地点「御陣取」より……29
第30図　D地点「御陣取」より……29
第31図　D地点試掘トレンチ平面図（S＝1/50）……30
第32図　D地点試掘トレンチ土層図（S＝1/50）……31
第33図　航空レーザー測量ルート……35
第34図　日野江城跡　等高線図（S＝1/5,000）……36
第35図　日野江城跡　赤色立体地図（S＝1/5,000）……37
第36図　原城跡・陣跡　等高線図（S＝1/12,500）……38
第37図　原城跡・陣跡　赤色立体地図（S＝1/12,500）……39
第38図　日野江城跡　1947年旧地形図（S＝1/5,000）……41
第39図　原城跡・陣跡　1947年旧地形図（S＝1/12,500）……42
第40図　日野江城跡　赤色立体地図および1947年旧地形図の合成図（S＝1/5,000）……43
第41図　原城跡・陣跡　赤色立体地図および1947年旧地形図の合成図（S＝1/12,500）……44
第42図　原城跡本丸崖面の経年崩落……45

写真目次

写真１　トレンチ１調査状況（南より）……11
写真２　SK－01調査状況（南より）……11
写真３　SK－02検出状況（西より）……11

写真４　SK－02調査状況（西より）……11
写真５　SK－03検出状況（北より）……11
写真６　SK－03調査状況（西より）……11
写真７　SK－01出土遺物……11
写真８　SK－02出土遺物……12
写真９　SK－03出土遺物……12
写真10　遺構外出土遺物……12
写真11　トレンチ１　調査前……14
写真12　トレンチ１調査状況（北西より）……14
写真13　トレンチ１調査状況（北東より）……15
写真14　トレンチ１南隅　深堀確認……15
写真15　トレンチ１　北東側サブトレンチ……15
写真16　トレンチ１　北西側サブトレンチ……15
写真17　トレンチ２　調査前……15
写真18　トレンチ２調査状況（西より）……15
写真19　調査地全景（南より）……17
写真20　トレンチ１調査状況（南より）……17
写真21　トレンチ２調査状況（南より）……17
写真22　出土遺物……17
写真23　トレンチ１調査状況（東より）……25
写真24　トレンチ２調査状況（南より）……25
写真25　トレンチ３調査状況（北より）……25
写真26　トレンチ４～９付近調査前（東より）……25
写真27　トレンチ４調査状況（東より）……25
写真28　トレンチ５調査状況（北西より）……25
写真29　トレンチ５・SX－02付近（北東より）……25
写真30　トレンチ５・SX－01半載状況（南東より）……25
写真31　トレンチ６調査状況（南西より）……25
写真32　トレンチ７調査状況（北東より）……26
写真33　トレンチ８調査状況（北東より）……26
写真34　トレンチ９調査状況（南より）……26
写真35　出土遺物……26
写真36　調査地点より日野江城跡を望む……26
写真37　Ａ地点トレンチ１調査状況（東より）……32
写真38　Ａ地点トレンチ２調査状況（東より）……32
写真39　Ｂ地点トレンチ１調査状況（南西より）……32
写真40　Ｂ地点トレンチ２調査状況（南より）……32
写真41　Ｂ地点トレンチ３調査状況（南より）……33
写真42　Ｃ地点トレンチ１調査状況（西より）……33
写真43　Ｃ地点トレンチ２調査状況（南東より）……33
写真44　Ｃ地点トレンチ３調査状況（南西より）……33
写真45　Ｄ地点調査状況（南より）……33
写真46　Ｄ地点トレンチ１南東側土層（北西より）……33
写真47　Ｄ地点トレンチ２調査状況（北西より）……33
写真48　Ｄ地点トレンチ２ピット検出状況（南東より）……33

表　目　次

表１　日野江町遺跡　出土遺物観察表……10
表２　日野江城二ノ丸北側地点　出土遺物観察表……24

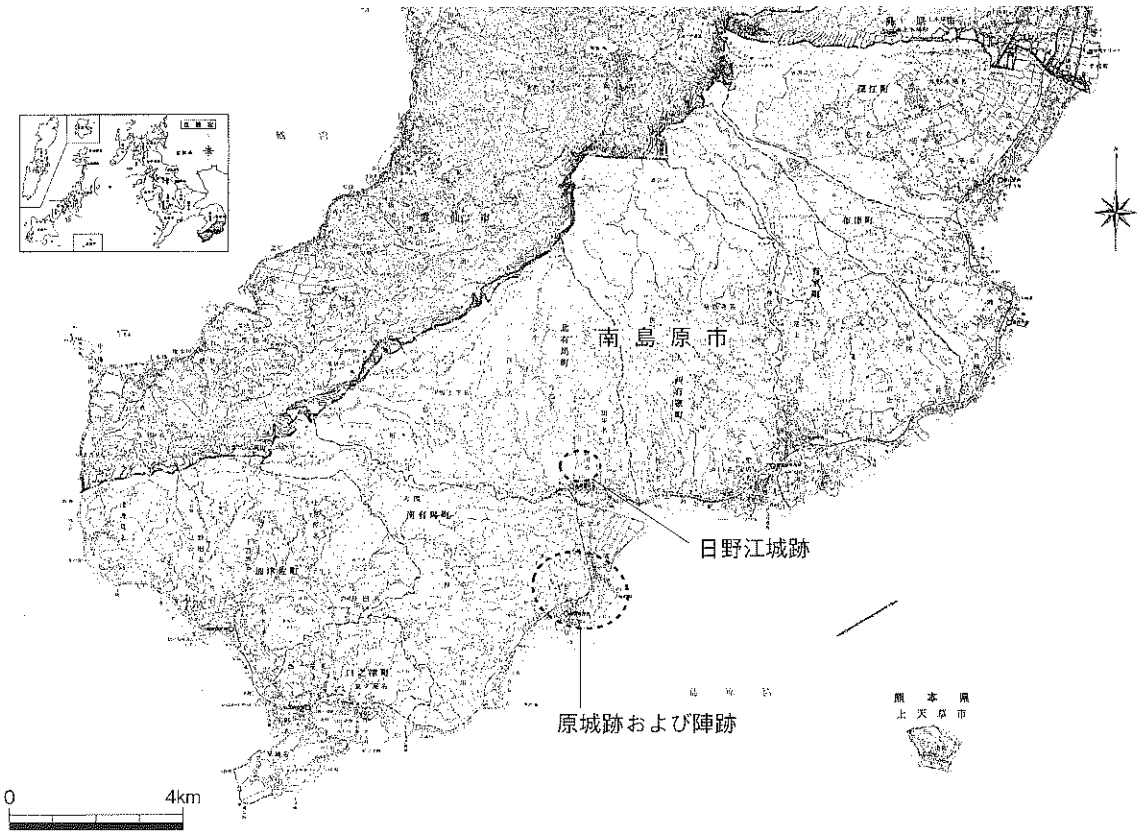
第１章　調査に至る経緯

南島原市の南部は中世～近世初頭にかけて肥前有馬氏の本拠となった地であり、その居城跡である日野江城跡および原城跡が今に残る。いずれも市の代表的な遺跡であり、国の史跡として指定を受けている。史跡内の発掘調査はこれまで、日野江城跡では二ノ丸地区、原城跡では本丸地区を中心に実施しており一定の成果を得ている。

一方、両史跡の周辺については殆ど調査を行っておらず、周辺環境の十分な確認に至っていない。例えば、長らく有馬氏の本城であった日野江城の城下、島原天草一揆の折に原城を攻囲した幕府連合軍の陣など、それぞれの城跡と切り離すことが出来ない関係にあり、こうした周辺地域の調査推進も以前より課題となっていた。そのため今回の調査に着手するに至った。

なお調査の対象範囲が非常に広く、特に陣跡（※1）などは遺構や遺物が残存しにくい性質があり、発掘による確認調査のみでは全体状況が把握しづらいという問題点もある。そうした面から今回、航空レーザー測量による現況地形の詳細把握、ならびに終戦後の航空写真から旧地形を復元する作業も併せて行った。

※１…幕府軍陣跡の推定地について、本文中の説明では以下「陣跡」と表記する。



第１図　調査対象地の位置

第２章　地理的・歴史的環境

長崎県南島原市は島原半島の南東部に位置する人口約51,000人の自治体である。農業や漁業などの一次産業が主産業であり、特産品として葉タバコ、メロン、スイカ、アスパラガス、車エビ、アラカブ（カサゴ）などが挙げられる。また素麺の加工業が非常に盛んであり、全国二位の生産量がある。地形的には市の北部と南部で大きく二相に分かれている。市北端の深江町は扇状地が多く、布津町から西有家町付近にはなだらかな丘陵地形が多い。一方、今回の調査に係る市の南部は山間部の割合が多く、海岸近くまで急峻な地形が迫っている箇所も多くみられる。そうした中でも日野江城跡と原城跡とを結ぶ中間の地帯は、有馬川の河口周辺に少しまとまった面積の沖積平野が広がっている。市南部で確認されている各時代の拠点的な遺跡がこの付近に見られるのも、そうした地形条件との深い関わりがあると思われる。

北岡金毘羅祀遺跡は弥生時代前期末～中期前半頃の墳墓遺跡であり、有馬川河口の南岸に接するように広がっている。昭和50年代の圃場整備事業によって遺跡の大部分が失われたが、その際の調査で合口甕棺や有柄式鉄剣型石剣などが発見されている。今福遺跡は有馬川沿いの河岸段丘上に築かれた複合遺跡であり、河口からは１kmほど上流側へ上った位置にある。遺跡の盛期は弥生時代中期～古墳時代初頭および中世とされる。前者の時期の遺構としては、竪穴式住居、ドングリ貯蔵穴、「Ｖ」字状の環濠の一部などが発見されており、遺物としては小型仿製鏡、銅鏃、ガラス製小玉、碧玉製管玉、立岩産石庖丁などや北部九州系、中九州系ほか、さらに遠方の外来系土器も出土している。各地からの搬入品と考えられる遺物が多く出土しており、威信財も含まれていることから拠点集落としての機能がうかがえる。地域の中での比較的恵まれた生産基盤を背景に、対外的な交易も行っていたのであろう。

原城跡の北三ノ丸付近には浦田観音東側遺跡が重複しており、平成19年度の発掘調査において弥生時代後期終末頃の土器が一括投機された状態で見つかっている。海に接した高台という地形条件は、後の時代において原城に堅固な防衛機能を与えるわけだが、それ以前においても土地利用があったことを知り得る貴重な資料である。

中世から近世初頭にかけて当地を支配した肥前有馬氏の出自については、常陸からの地頭職として補任されたとする説、在地の開発領主からの発展とする説などがある。また、肥前有馬氏が代々の居城とした日野江城の築城時期については鎌倉期とする説および南北朝期とする説がある。16世紀後半には口之津を介して伝来したキリスト教が、城主の有馬義直、有馬晴信らによって庇護され普及する。天正年間には遣欧使節団の派遣事業も行われている。これまでに実施された発掘調査では切石や仏塔などを用いた階段遺構、金箔を施した鳥衾瓦や大量の瓦、土師器などが見つかっている。

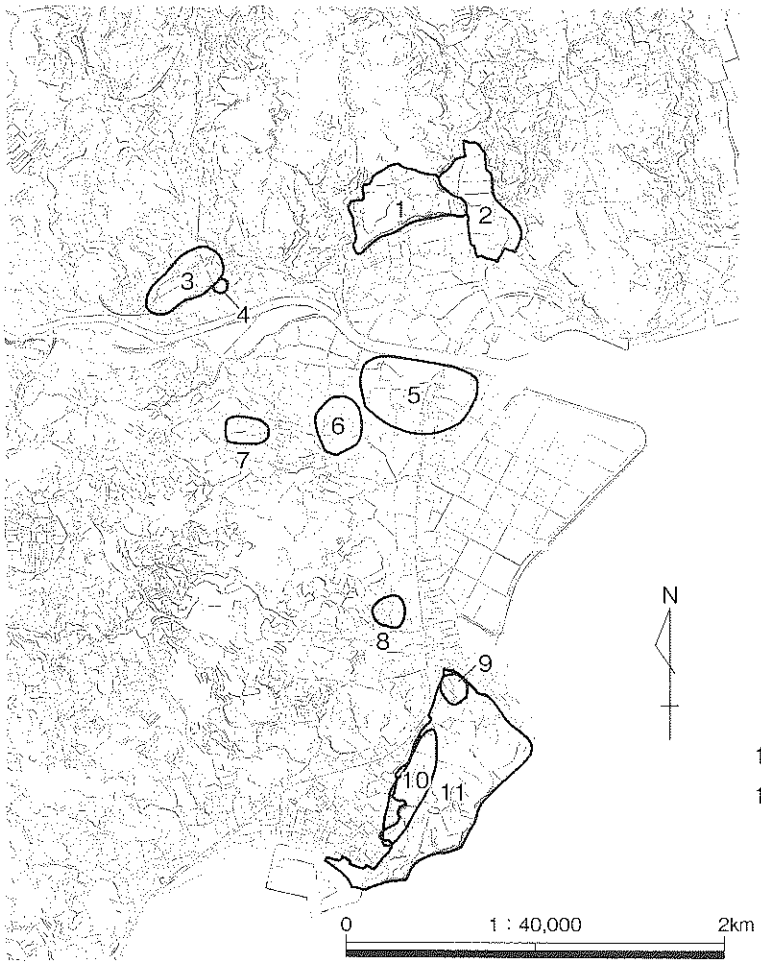
原城は日野江城の支城として築かれた城郭であるが、その規模は本城である日野江城を大きくしのぎ、軍事施設としての機能も、立地条件を含めてより堅牢なものとなっている。築城時期については従来、明応五年（1492）説が長く用いられてきたが、実際には定かでない。総石垣を備えた本丸についてはイエズス会の記録や、近年の発掘調査によって慶長四年（1599）から同九年（1604）の築城であることが判っている。

日野江城と原城は元和元年（1615）の一国一城令により廃城となる。広く知られる島原天草一揆はこれより20年ほど後の寛永十四年（1637）から翌十五年（1638）にかけて起こっており、廃城となっていた原城が、一揆勢の最終的な拠点となった。原城に立て籠もった一揆勢の総数は通説的には３万

７千人、対する幕府軍の総勢は約12万人とされる。約４ヵ月に及ぶ原城の攻囲戦は兵糧攻めに遭った一揆勢が、幕府軍の総攻撃を受け、寛永十五年二月二十八日に終結する。籠城した一揆勢の殆どが犠牲になったとされてきたが、この点については疑問視する指摘がある（服部2000）。平成に入ってからの原城跡の本丸を中心とした発掘調査においては、戦いの激しさを物語るように、夥しい数の人骨、一揆勢が身に着けていたと考えられるキリシタン遺物、銃弾、砲弾などの遺物などが出土しており、一揆後の徹底した城の破却も確認している。また石垣や門跡など、原城本来の構造物や、大量の瓦、貿易品を含む多くの陶磁器類も見つかっている。

島原天草一揆は、以後の幕府の統治政策、あるいは諸外国に対する閉鎖的な政策などにも大きな影響を与えるなど、日本史においても非常に重要な事件であった。一揆後、著しく荒廃した当地には九州各地や小豆島などからの移住政策により、現代へと至る基礎が築かれている。

＜参考文献＞
外山幹夫 1998「史跡日野江城跡の概要」『日野江城跡』北有馬町文化財調査報告書第２集　北有馬町教育委員会
長崎県教育委員会編 1994『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第111集
服部英雄 2000「原城と有明海・東シナ海　－天草・島原の乱を見直す－」『原城発掘』新人物往来社
古田正隆編 1981『北岡金毘羅祀遺跡調査報告』南有馬町文化財調査報告書第１集　南有馬町教育委員会
南島原市教育委員会 2010『原城跡Ⅳ』南島原市文化財調査報告書第４集
南島原市教育委員会 2011『日野江城跡　総集編１』南島原市文化財調査報告書第６集
宮崎貴夫編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集　長崎県教育委員会



1　日野江城跡（城跡/中世）
2　日野江城城下地区遺跡（集落跡/中・近）
3　今福遺跡
（遺物包含地/旧・弥・古・平・中・近）
4　塚田古墳（古墳/古墳）
5　北岡金比羅祀遺跡（墳墓/弥・奈）
6　常光寺前駅西側遺跡（遺物包含地/弥生）
7　法華寺跡（寺跡/中世）
8　浦田遺跡（墳墓/古・奈・平）
9　浦田観音東側遺跡（遺物包含地/弥生）
10　築山遺跡（遺物包含地/縄文）
11　原城跡（城跡/中・近）

第２図　調査地周辺の主な遺跡（Ｓ＝１/40,000）

第３章　発掘調査

第１節　調査地点

今回、発掘調査を実施した箇所は第３図に示すとおりである。

第３図　調査地点の位置（Ｓ＝１/25,000）

第２節　調　　査

１．日野江町遺跡（試掘調査）

所 在 地　南島原市北有馬町戊2595-１、2595-２
調査期間　平成22年８月２日～平成22年９月３日
調査面積　16㎡

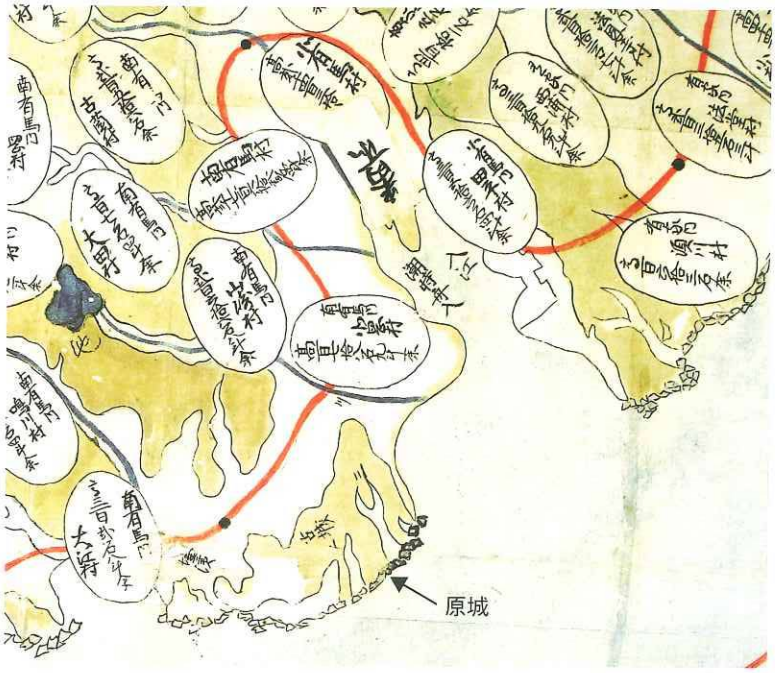
第４図　調査区の位置（Ｓ＝１/2,500）

(1)　位置と環境

調査箇所は史跡日野江城跡より南側に100m余りの距離に位置する。宅地の一角にある空き地であり、標高は３m程度である。周囲は道幅が狭く住宅が密集している。こうした狭い地割りは明治期の地籍図において確認できるものであり、現代までこれが踏襲されているようである。

(2)　調査の概要

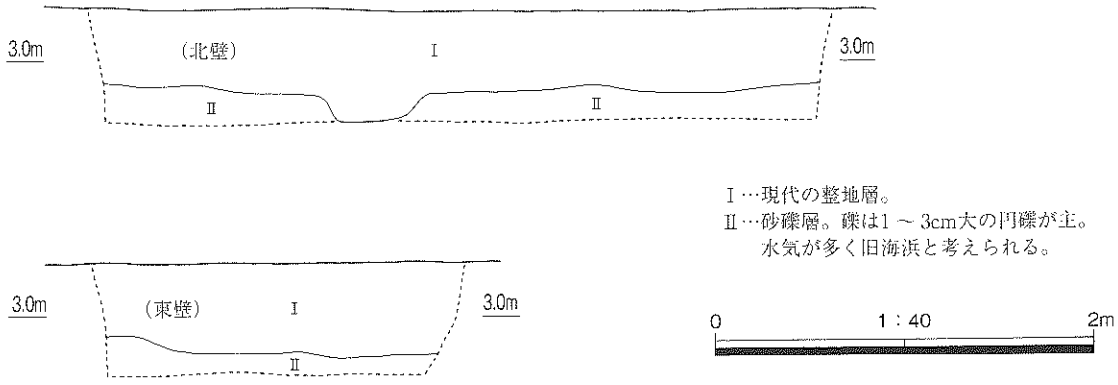
日野江城が政治的機能を保持していた当時における、城の南側一帯の土地利用状況を確認する目的で試掘調査を行った。２m×４mのトレンチを２箇所設定し、人力掘削により遺構・遺物の確認を行った。いずれのトレンチにおいても、地表付近では耕作や現代の整地の影響が認められたが、地表より約40cmの深度で混礫砂層を確認した。同層付近では水の浸み出しが多くみられ、旧海浜の可能性が高いと思われる。調査地点から現在の海岸線までは直線で１km弱の距離があるが、17世紀中頃の絵図をみると日野江城にあたる箇所の南側には「入江」が入り込んでおり（第５図中央付近）、「潮時舟入」の文字も見られる。潮が満ちた際には、日野江城のすぐ近くまで船が出入り出来たのであろう。



第５図　正保二年(1645)『高力摂津守領分図』（関係部分に一部加筆）

トレンチ２においては天川漆喰（※2）を壁材とする土坑２基、素掘りの土坑１基を確認した。いずれも上部が削平されており、本来の深さは不明である。それぞれ破砕した陶磁器片を多く含んでおり、廃棄土坑と考えられる。遺物の年代は主に18世紀後半～末頃のものである。

※２…長崎県地方でみられるタタキの一種。安山岩の風化土に石灰を加え、水で練り合わせて硬化させるもの。



第６図　トレンチ１土層図（S＝1/40）

(3) 検出遺構（第７図）

SK－01

壁材に天川漆喰を用いた土坑状の遺構である。部分検出であるが、平面観は隅丸方形になると思われる。南北軸の長さが1.6m余り、東西軸の長さは調査区外となるため不明である。上部が削平されており本来の深さは不明であるが、残存分で20cm～25cmほどの深さがある。壁材に用いられた漆喰は、概ね２cm程度の厚さで整っている。漆喰と掘り込みの間には５～10cmほどの厚さで粘土が貼られている。遺構の埋土には、上部が削平された際に混入したとみられる漆喰片、粘土ブロックが多く含まれる。土坑底部に上面の平たい石が２石あり、およそ栓をした状態となっている。遺構本来の機能は溜めマスまたは雪隠などか。遺構内からは18世紀後半～末頃の陶磁器片が出土した。

SK－02

SK－01と同様の構造を持つ土坑である。検出面における南北軸の長さは約1.2mであり、東西軸は不明である。やはり上部が削平されており、埋土に漆喰片および粘土ブロックが多く含まれていた。残存する深さは最大35cmほどである。SK－01と比べると漆喰の残りが悪い。漆喰と掘り込みの間に貼られた粘土は15～25cmであり、SK－01に比べると分厚い。遺構内からは18世紀後半～末頃の陶磁器片が多く出土しており、一括廃棄を行った可能性がある。

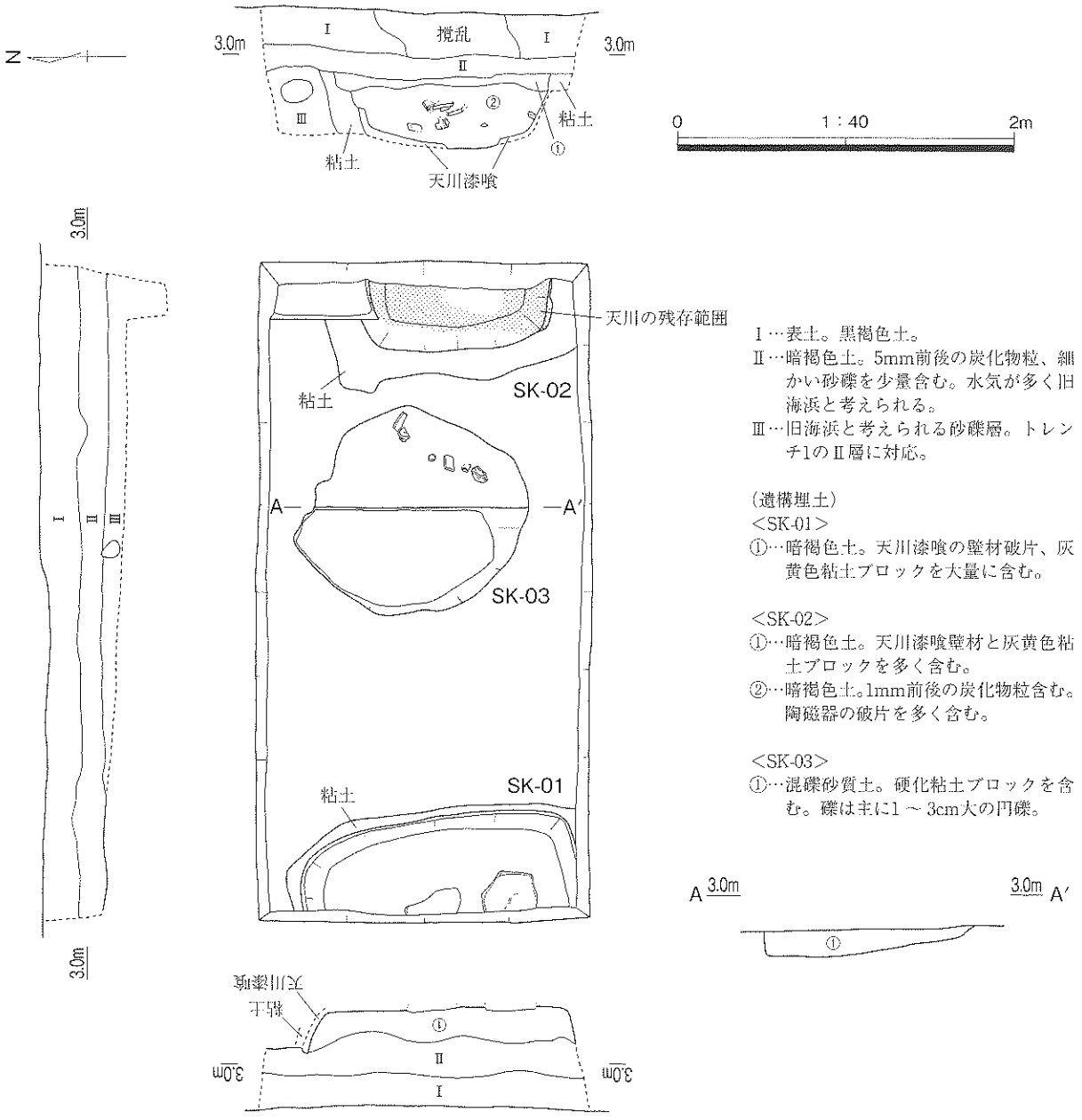
SK－03

素掘りの土坑として扱った。平面観は略楕円形であり南北軸が約1.4m、東西軸が約1.2mである。上部は削平されているようであり、検出面からの残存深度は最大でも10cm強である。立ち上がりは北側が垂直気味であり、南側は緩やかとなっている。18世紀後半～末頃の陶磁器片を多く含む。

(4) 出土遺物（第10～13図、表１）

調査において出土した遺物は約580点である。近現代のものを除くと、18世紀後半～末頃のものが中心であり、主に土坑内より出土した。

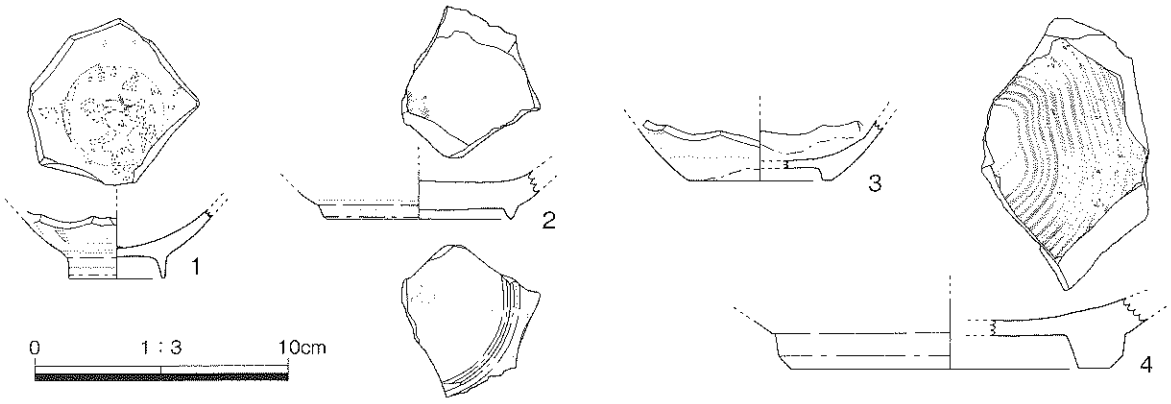
第８図はSK－01の出土遺物であり１が磁器、２～４が陶器である。１は染付碗の底部であり、見込みに二重の円圏を描く。砂が多く付着しているが、中央の文字は「壽」と思われる。２・３は皿の



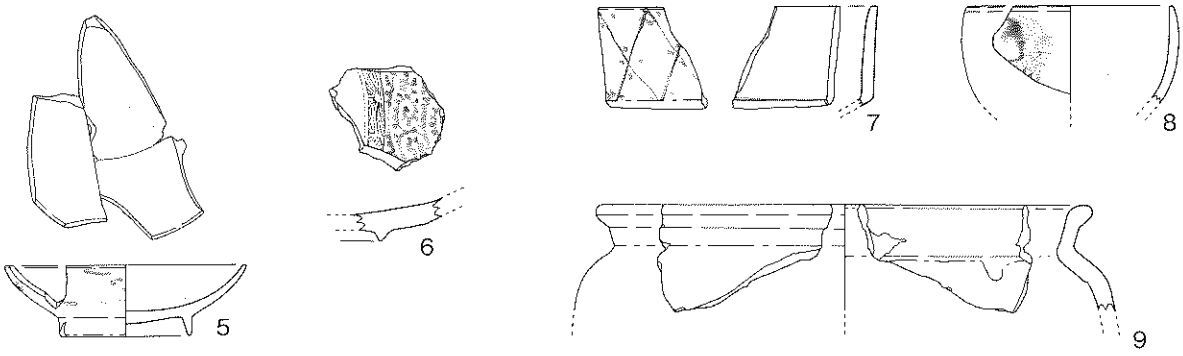
第７図　トレンチ２遺構配置図・土層図（S＝1/40）

底部である。２は厚手であり、見込みに五弁花紋、高台内部に「寿」の文字がある。全体に透明釉を施すが、畳付のみ無釉である。３は呉須皿状の底部であり、外面は刷毛目文様、内面は釉掛けが施される。畳付は無釉であり、砂の付着がみられる。４は大型鉢の底部である。内面を施釉し、波状の刷毛目を描く。高台の外側は斜めに削り落としている。

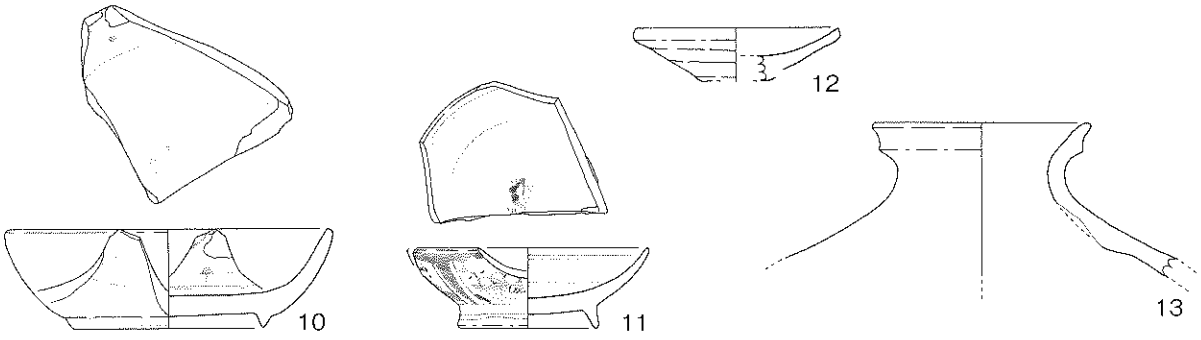
第９図はSK－02の出土遺物であり５～８が磁器、９が陶器である。５は染付皿であり、高台がやや高く、緩く内湾して口縁が広がる器形である。内面は円圏を引き、見込みに松葉を描く。６は染付の皿または碗の底部である。外面には圏線を描いており、高台に二条、体部側に一条ある。全体に施釉しているが畳付のみ無釉である。内面は帯状の文様で区画し、外側に蛸唐草を描く。７は筒状の碗



第８図　SK－01出土遺物（S＝１／３）



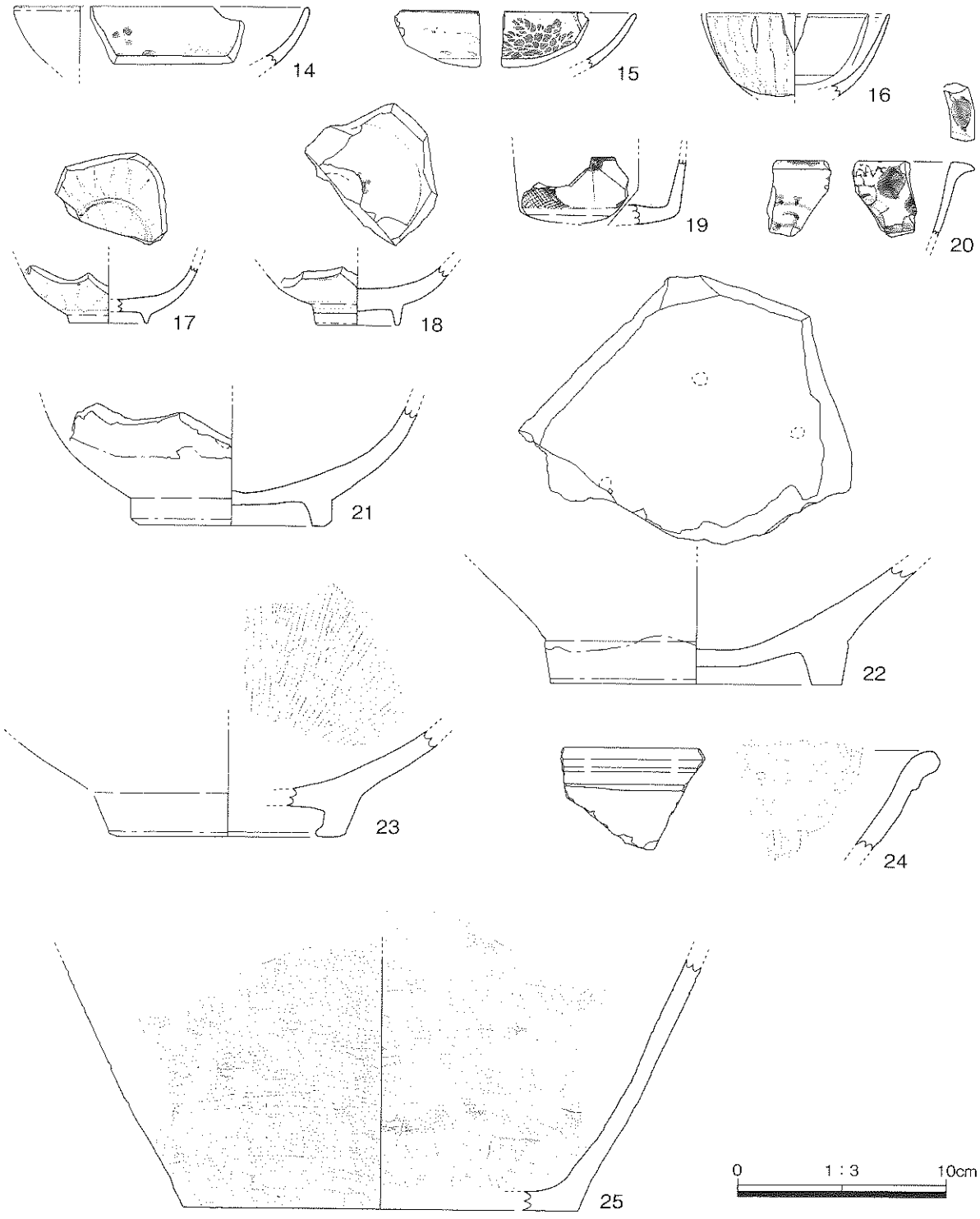
第９図　SK－02出土遺物（S＝１／３）



第10図　SK－03出土遺物（S＝１／３）

である。外面に斜格子状の文様を描く。８は丸碗であり、やや腰の張る器形である。９は甕である。肩の張りがやや強く、頸部はあまりすぼまらない。口縁は外側へ短く立ち上がり、端部が外反気味に肥厚する。

第10図はSK－03の出土遺物である。10は磁器皿であり、内面の見込みに二重の円圏、中央に五弁花紋を描く。11は内湾気味に口縁が広がる染付皿である。外面は縁取りした区画を設け、間に松を描く。内面は円圏を引き、見込みに草花を描く。12はロクロ引きによって成形した小型の陶器皿である。口縁が直線的に外側へ開く器形である。13は大型の陶器瓶の口縁と思われる。肩張りが強く、頸部が細くすぼまる。口縁端部は外反気味に短く開く。



第11図　遺構外出土遺物（S＝1／3）

第11図は遺構外の出土遺物である。14・15は口縁が内湾気味に開く皿である。14は染付であり、内面に花弁を描く。15の内面はコンニャク印判により牡丹を描く。16～18は染付の丸碗である。16・17は網目紋を主体とした装飾であり、18は見込みに五弁花紋を描く。19は筒状の染付碗である。体部外面に菊を描く。20は染付の口縁であるが、器種は判然としない。外面に蛸唐草、内面に植物を描く。口縁端部は肥厚気味に外側へ拡張しており、口唇部にあたる位置にも施文する。21・22は陶器の鉢で

ある。21は鉄釉により内面が全釉、外面が釉掛けである。22は淡い色調の緑釉で、内面が全釉、外面が釉掛けである。内面には胎土目がある。23・24は擂鉢である。23は畳付の部分が内側へ肥厚する。内面の擂目は幅広の工具によって施す。24は口縁部であり端部が外反気味に肥厚する。外面は端部下に突帯を一条巡らせる。内面の擂目は上端を撫で揃える。25は大型の陶器甕の底部である。内外面とも横ナデ調整の下に格子目タタキが残る。

(5) 調査のまとめ

17世紀中頃の史料に描かれるよう、日野江城の南側に海がかなり迫っていた状況を現地調査においても確認することができた。またトレンチ2の廃棄土坑から出土した遺物は18世紀後半～末頃のものが主であり、これより古い年代のものは出土していない。遅くとも18世紀後半頃までには日野江城南側の海浜の埋め立てが開始され、本格的な土地利用が開始されていたと考えられる。

以上の状況から日野江城の城下町について考えてみると、日野江城が政治的に機能していた年代、すなわち廃城となる元和二年（1616）頃までは、海岸線の多少の出入りを考慮しても、城の南側に城下町が大きな広がりをもって展開していた可能性はかなり低いと言えるだろう。本丸の位置に対して二ノ丸や大手を東側に構える日野江城の構造、周辺地形などを考慮するならば、その城下は城の東側を中心に展開していた可能性が相対的に高いものと思われる。今後の調査において検証していく必要があろう。

なお今回調査地点については、日野江城廃城後における周辺地域の土地利用の変遷を知るうえで貴重な事から、調査後に「日野江町遺跡」として埋蔵文化財包蔵地の登録を行った。

表1　日野江町遺跡　出土遺物観察表

図	番号	出土箇所	種別	器種	生産地	文様・特徴など		備考
						内面	外面	
8	1	トレ2・SK-01	磁器	碗	肥前	二重円圏、見込みに「壽」	区画	底径3.8cm
	2	トレ2・SK-01	陶器	皿	肥前	見込みに五弁花紋	高台内に「寿」	底径7.3cm（復）
	3	トレ2・SK-01	陶器	皿	肥前	釉掛け	ハケ目	底径5.6cm（復）
	4	トレ2・SK-01	陶器	鉢	肥前	波状ハケ目	高台ケズリ落とし	底径12.6cm（復）
9	5	トレ2・SK-02	磁器	皿	肥前	円圏、見込みに「松葉」	雲か	口径9.6cm（復）　底径5.0cm
	6	トレ2・SK-02	磁器	碗または皿	肥前	帯状紋、蛸唐草		
	7	トレ2・SK-02	磁器	碗	肥前	口縁に二重圏線	格子目	
	8	トレ2・SK-02	磁器	碗	肥前		草花	口径8.2cm（復）
	9	トレ2・SK-02	陶器	甕	肥前	釉掛け	口縁端部肥厚	口径19.4cm（復）
10	10	トレ2・SK-03	磁器	皿	肥前	見込みに五弁花紋	草	口径13.0cm(復)　底径7.5cm(復)
	11	トレ2・SK-03	磁器	皿	肥前	円圏、見込みに草花	区画、松	口径9.6cm（復）　底径5.4cm
	12	トレ2・SK-03	陶器	皿	肥前	ナデ	ナデ	口径8.0cm（復）
	13	トレ2・SK-03	陶器	壷	肥前	ナデ　口縁端部外反	ナデ	口径8.4cm（復）
11	14	トレ1・I	磁器	皿	肥前	圏線、花卉		口径14.2cm（復）
	15	トレ2・I	磁器	皿	肥前	牡丹（コンニャク印判）	体部に圏線	
	16	トレ1・I	磁器	碗	肥前	口縁に二重圏線	網目	口径9.0cm（復）
	17	トレ2・II	磁器	碗	肥前	網目、見込みに二重円圏	網目	底径3.8cm（復）
	18	トレ1・I	磁器	碗	肥前	見込みに五弁花紋	体部と高台境に圏線	底径3.8cm
	19	トレ1・I	磁器	碗	肥前		網目地に白抜きの菊	
	20	トレ2・I	磁器	碗か	肥前	蔓草	蛸唐草	
	21	トレ1・II	陶器	鉢	肥前	ナデ	釉掛け	底径8.8cm
	22	トレ1・I	陶器	鉢	肥前	ナデ、胎土目	ナデ	底径14.0cm
	23	トレ1・I	陶器	擂鉢	肥前	幅広の擂目	ナデ	底径10.6cm（復）
	24	トレ1・I	陶器	擂鉢	肥前	擂目　上端ナデ揃え	端部外反　肥厚	
	25	トレ1・I	陶器	甕	肥前	格子目タタキ→ナデ	格子目タタキ→ナデ	底径19.0cm（復）

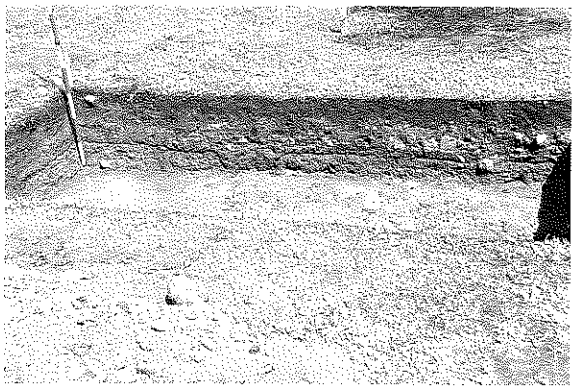


写真１　トレンチ１調査状況（南より）

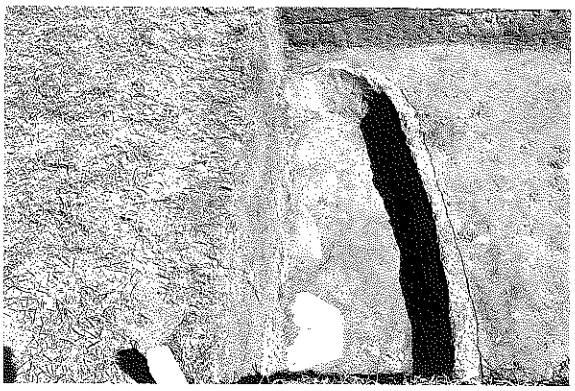


写真２　SK－01調査状況（南より）

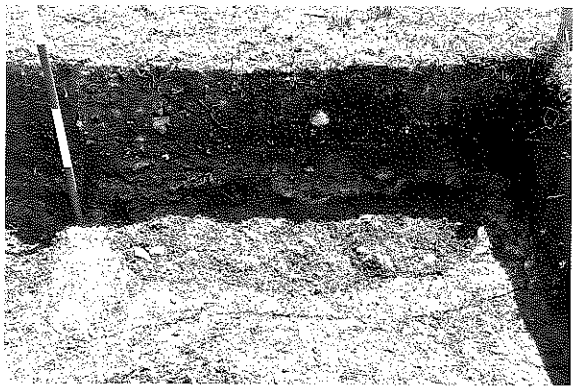


写真３　SK－02検出状況（西より）

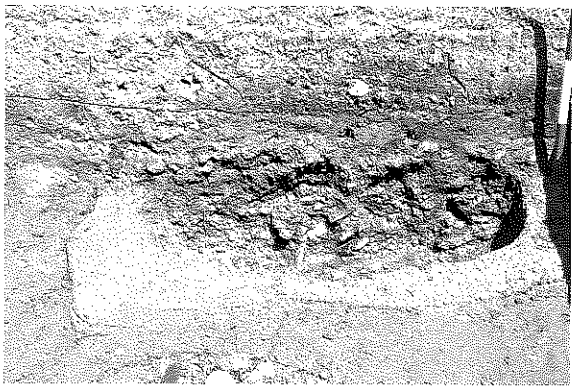


写真４　SK－02調査状況（西より）

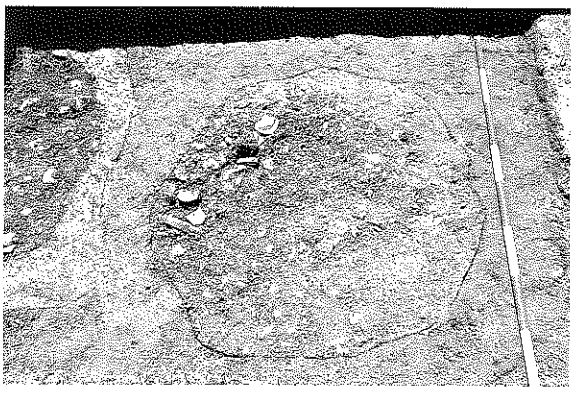


写真５　SK－03検出状況（北より）

写真６　SK－03調査状況（西より）

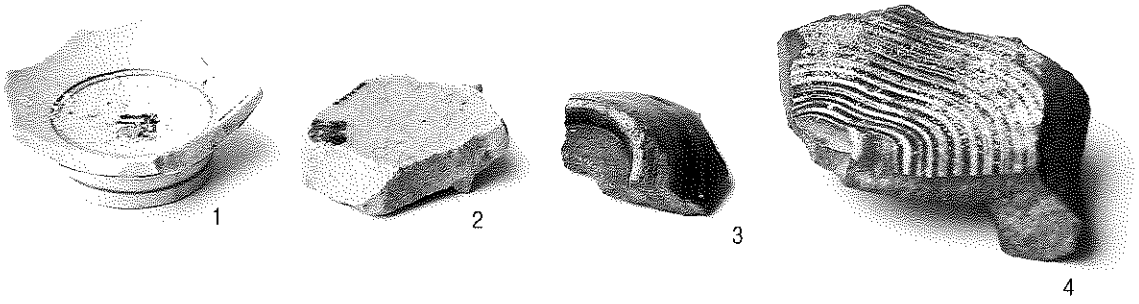


写真７　SK－01出土遺物

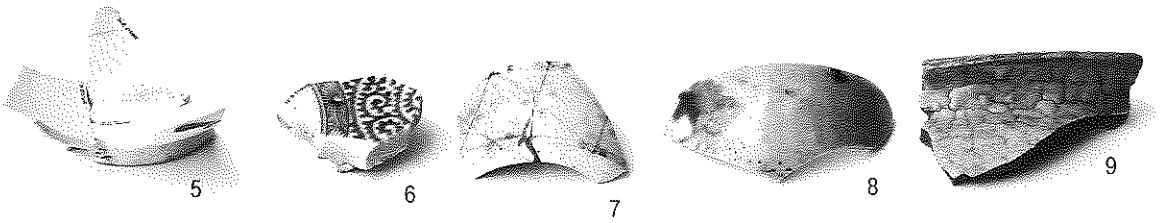


写真 8　SK－02出土遺物

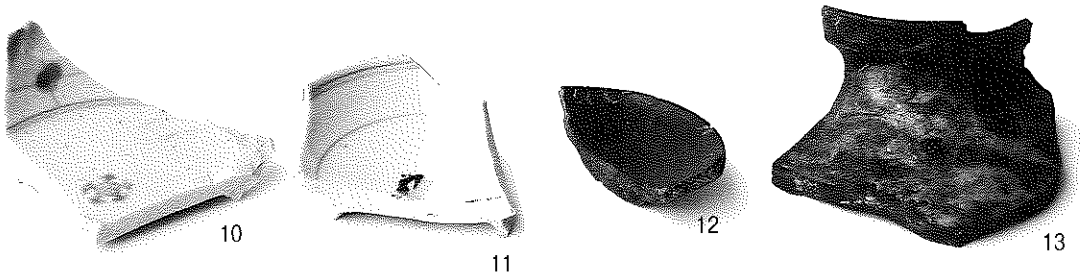


写真 9　SK－03出土遺物

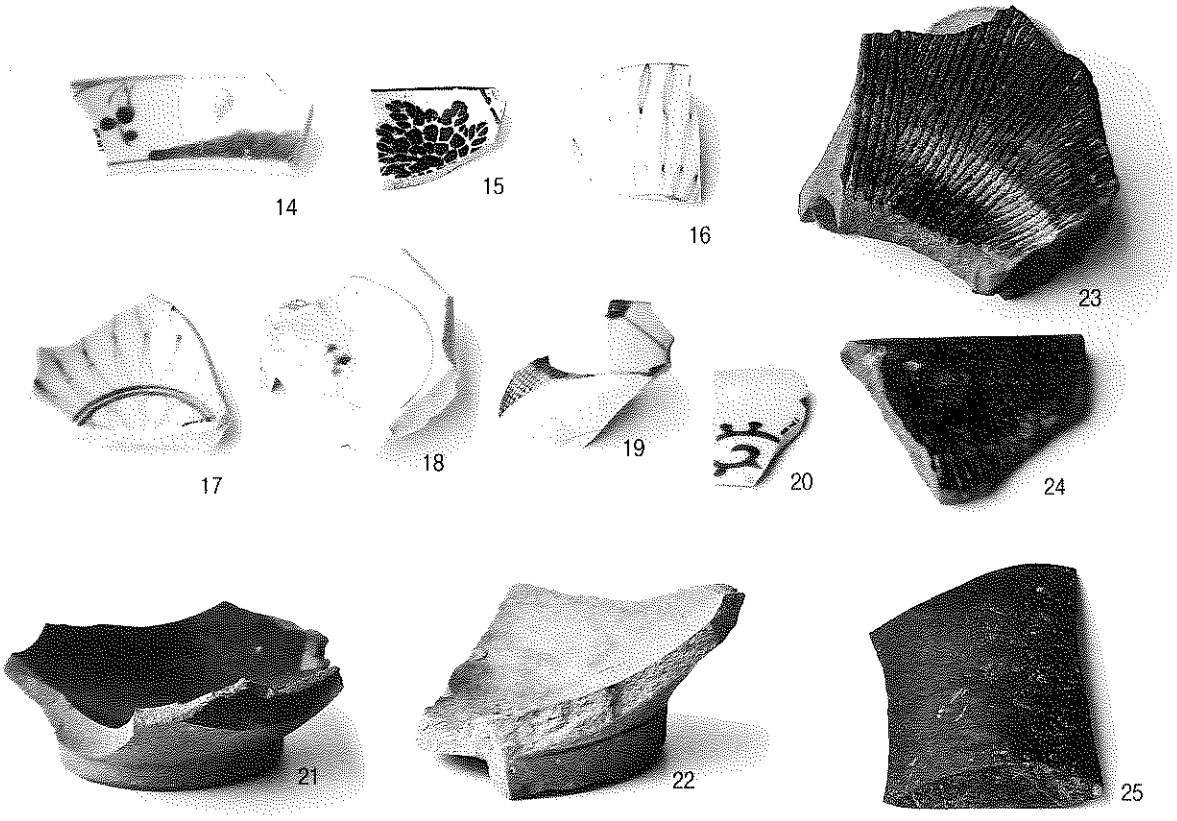


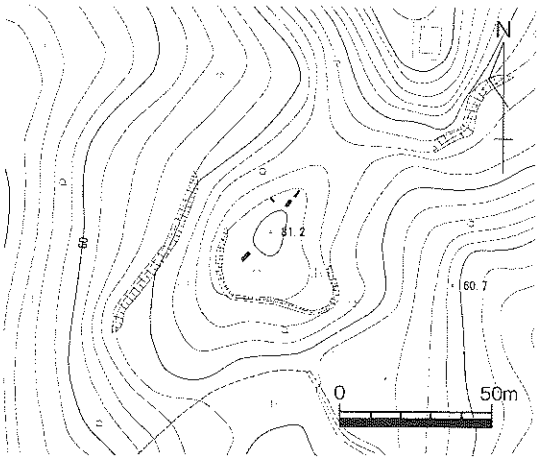
写真10　遺構外出土遺物

2．日野江城跡 曲輪12（試掘調査）

所 在 地　南島原市北有馬町戊1434イ、1435-1、1435-2

調査期間　平成22年８月２日～平成22年９月３日

調査面積　23㎡



第12図　調査区の位置（S＝1/2,500）

(1) 位置と環境

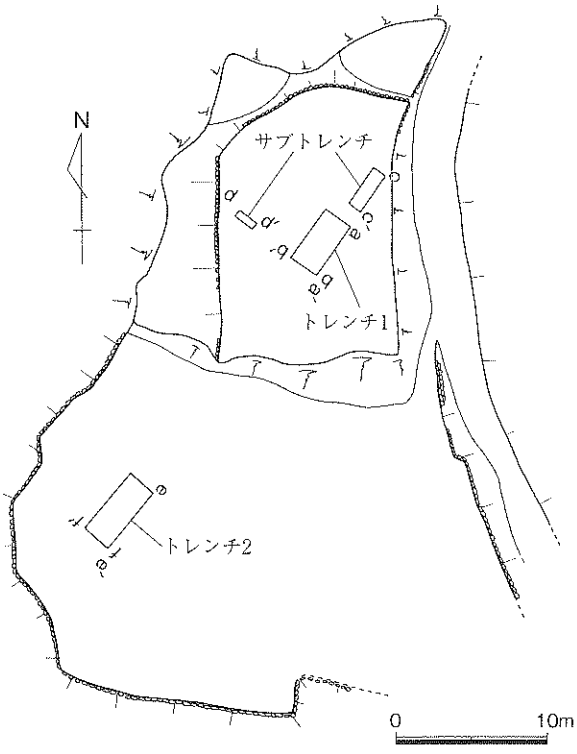
調査地点は国史跡日野江城跡の史跡範囲北側に隣接した山林にある。近年の踏査により、おおむね３段の平場よりなる曲輪（※3）と考えられる地点である。北側および東側に竪堀状の谷があり、西は斜面地である。また南側には堀切状の地形があり、周囲に対して最も小高い場所となっている。最高所の標高はおよそ約82mであり、本丸の最高所とほぼ同じである。

※３…現在、曲輪12として取り扱いを行っている。

(2) 調査の概要

調査地点はその地形的特徴から日野江城に付帯する物見台などの機能が考えられる箇所である。今回、内容確認の目的で試掘調査を行った。

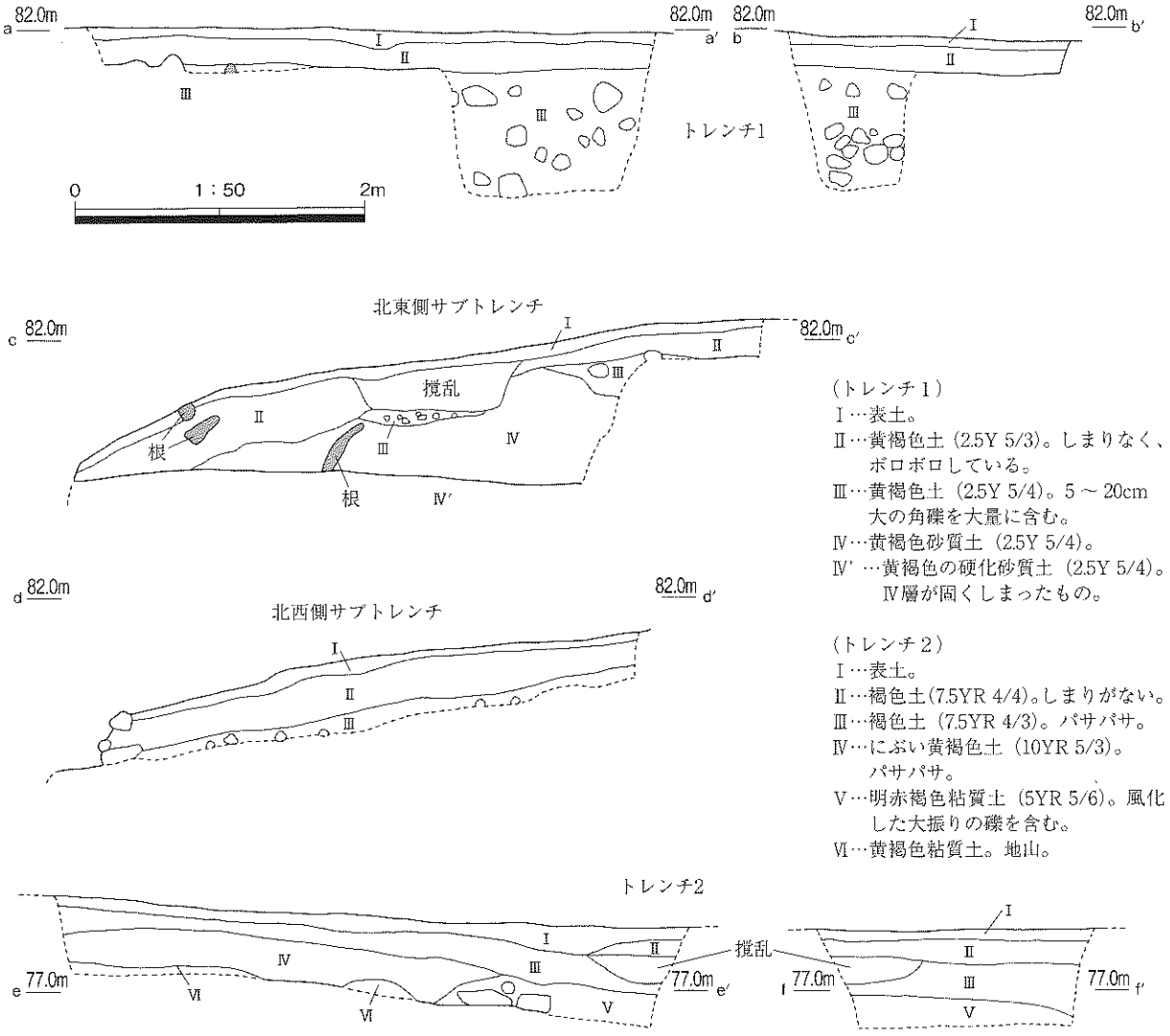
３段ある平場のうち、北側最上段の平場に２m×４m、中段となる中央の平場に２m×4.6mの基本トレンチを設け、必要に応じてサブトレンチを追加した。掘削作業は全て人力による。調査において遺構および遺物は検出しなかった。



第13図　トレンチ配置図（S＝1/500）

(3) 調査のまとめ

限られた部分の調査ではあるが、結果として遺構・遺物の検出はなかった。ただし物見台などのように、居住や長期滞在の為の空間利用でなかったならば、遺構や遺物が残る可能性も低くなるため考慮が必要である。同地点については、第４章で実施しているような地形測量調査、日野江城全体の空間構造を踏まえた慎重な評価が必要であろう。



第14図　調査区土層図（S＝1/50）

写真11　トレンチ1　調査前

写真12　トレンチ1調査状況（北西より）

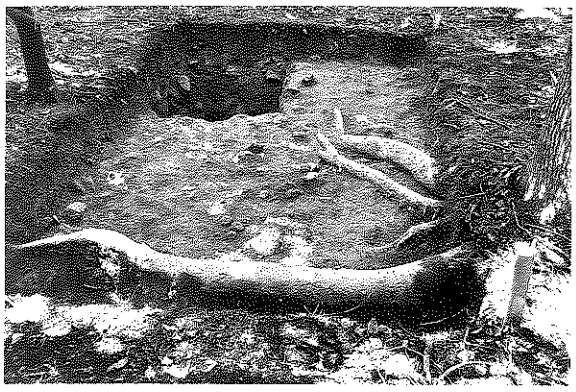


写真13　トレンチ１調査状況（北東より）

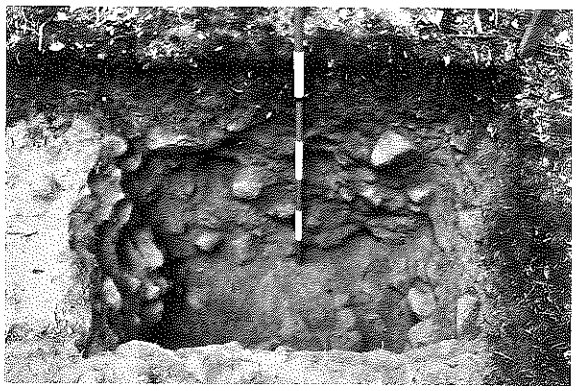


写真14　トレンチ１南隅　深掘確認

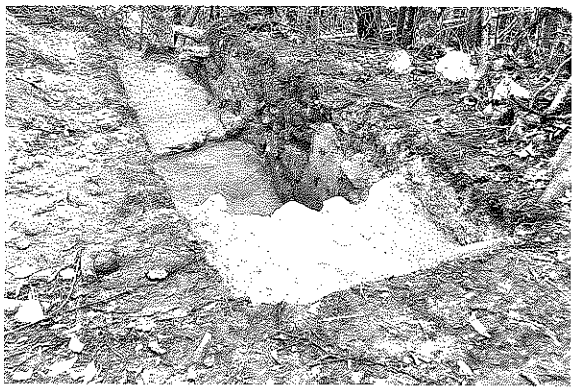


写真15　トレンチ１　北東側サブトレンチ

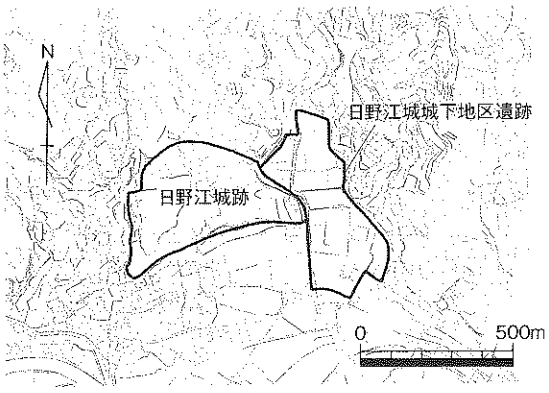
写真16　トレンチ１　北西側サブトレンチ

写真17　トレンチ２　調査前

写真18　トレンチ２調査状況（西より）

3．日野江城城下地区遺跡（範囲確認調査）

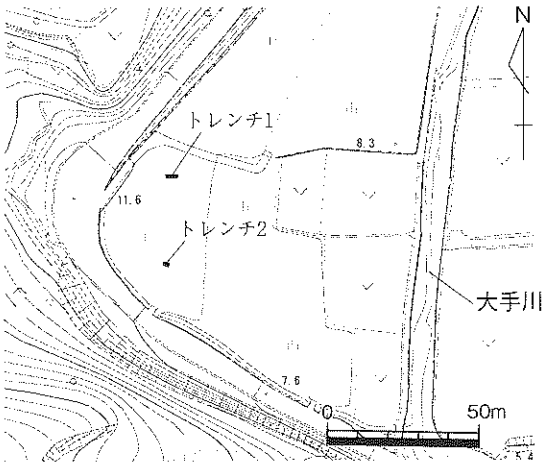
所 在 地　南島原市北有馬町戊2197-1
調査期間　平成23年５月30日～平成23年６月28日
調査面積　16㎡



第15図　周知の遺跡範囲（S＝1/25,000）

(1) 位置と環境

調査地点は国史跡日野江城跡の二ノ丸より県道を隔てて北側に隣接する位置にある。現況は畑地であり標高は10m程である。東を大手川が流れており、日野江城跡と川に挟まれるような位置関係となっている。発掘調査と並行して行った聞き取りによれば、同地点は昭和57年の長崎大水害の後に、大量の客土によって造成されているようである。



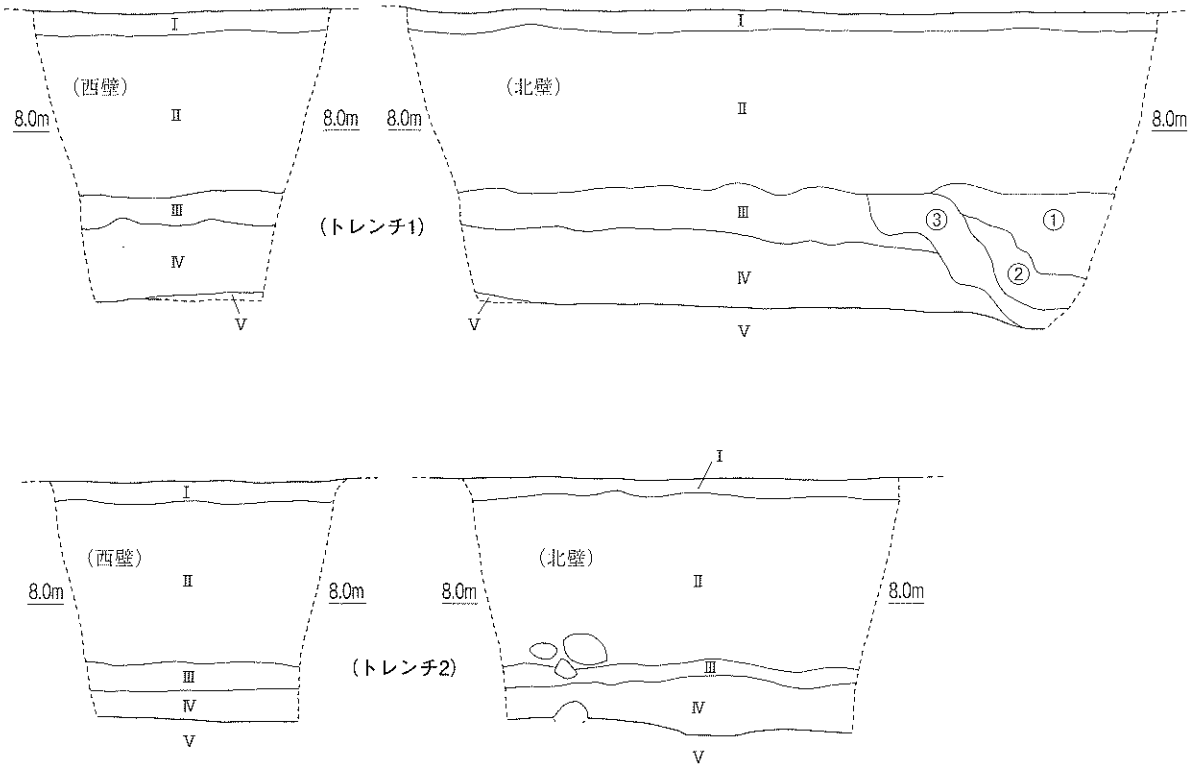
第16図　調査区の位置（S＝1/2,500）

(2) 調査の概要

日野江城跡東側における17万㎡余りの田畑一帯が、日野江城城下地区遺跡として埋蔵文化財包蔵地に登録されている。今回は日野江城跡に近接する畑地を選定のうえ２m×５mおよび２m×３mのトレンチを各一箇所設け、人力掘削により遺構・遺物の確認にあたった。いずれのトレンチにおいても、表土下に１mを越える分厚い造成土がみられた。先に述べた、長崎大水害の際に発生した土砂を客土として持ち込んだものと考えられる。トレンチ１では客土直下に溝跡がみられたが、埋土にビニル片などを含んでおり近現代のものと確認している。このほか調査を通じて遺構は検出していない。客土の除去後、青灰色粘土層（Ⅲ層）を経て灰黄色土層（Ⅳ層）を検出した。この淡黄色土の上面付近において、陶磁器や土師器など中近世の遺物がわずかながら出土したが、小片ばかりであり土師器片を観察するとローリングの影響が見受けられる。日野江城側からの流れ込みの可能性が高いと思われる。

(3) 調査のまとめ

調査の結果、遺構は確認できず、わずかながら出土した遺物も日野江城側からの流れ込みである可能性が高いと思われる。今回調査地付近が日野江城の城下の機能を持っていたという評価は、今のところ与えることができない。包蔵地内での詳細な範囲確認調査を進めていく必要があるだろう。



Ⅰ…表土（耕作土）。
Ⅱ…現代の造成土。
Ⅲ…青灰色粘土。近現代遺物を含む。
Ⅳ…しまりのある灰黄色土（2.5Y 6/2）。5mm大の明褐色粒、炭化物粒少量含む。
Ⅴ…暗灰黄色粘質土（2.5Y 5/2）。1cm大の小石、褐色粒を多く含み、層全体が赤みをもつ。
（溝状遺構）
①…黄褐色粘質土。底付近に拳大の礫、木片などの有機物多い。
②…しまりのある褐灰色土（10YR 4/1）
③…しまりのある暗青灰色土（5B 4/1）

0　1：50　2m

第17図　調査区土層図（S＝1/50）

写真19　調査地全景（南より）

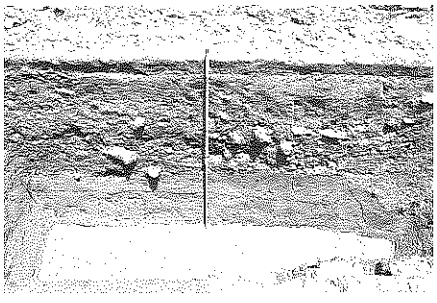


写真20　トレンチ1調査状況（南より）

写真21　トレンチ2調査状況（南より）

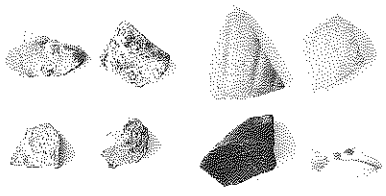
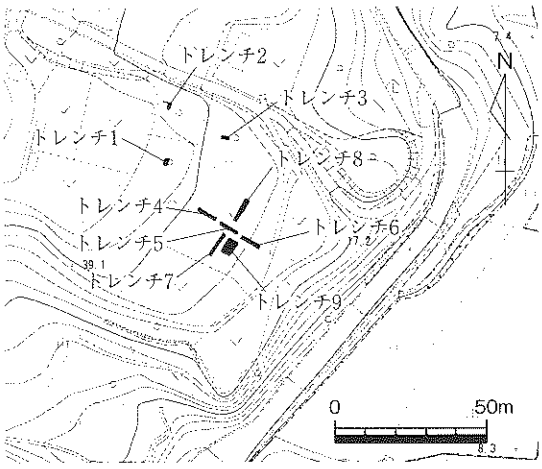


写真22　出土遺物

4．日野江城二ノ丸北側地点（試掘調査）

所 在 地　南島原市北有馬戊2223、2224、2225
調査期間　平成23年６月28日～平成23年７月28日
　　平成23年11月14日～平成23年12月16日
調査面積　136㎡



第18図　調査区の位置（S＝1/2,500）

(1) 位置と環境

調査地点は日野江城跡二ノ丸の北側にある丘陵先端付近である。標高は30m前半台で、二ノ丸よりやや高い位置にある。そのため二ノ丸内部を全体的に見渡すことができる。やや南西に目を向けると、竪堀状の谷地を挟んで本丸がある。本丸に対しては少し見上げる格好だが、見通しはよい。

(2) 調査の概要

日野江城跡の周辺において、同時代の土地利用状況を確認する目的で実施した試掘調査である。作付けの関係で二期に分けて調査を実施した。前半の調査がトレンチ１～３、後半がトレンチ４～９にあたる。

前半の調査においては２ｍ×３ｍを基本とするトレンチを３箇所設け、人力掘削により遺構と遺物の確認にあたった。近年まで蜜柑畑として利用されていた際の暗渠が見られたほかは、遺構・遺物の検出はなかった。後半の調査では、畑地を十字に切るように２ｍ幅のトレンチを設定し（トレンチ４～８）、その後、補完的な調査区を設けた（トレンチ９）。調査の結果、調査地の旧地形は現在より急な傾斜であったが、トレンチ４からトレンチ６方向に向けて土砂を切り押しすることで傾斜の緩和が図られていることが判った。現代の造成と考えられる。そのためトレンチ４では表土を除去するとすぐに地山に達し、逆にトレンチ６においては丘陵先端へ向かって下る地山の上に造成土が厚く堆積する状況が見られた。一方、調査地内の比高がおよそ中間となるトレンチ５、７～９では、こうした造成の影響が比較的少なく、ピットなどの遺構を確認した。このほかトレンチ７からトレンチ９にかけて浅い落ち込みがあり、覆土に礫が多く混入する状況が見られた。覆土および遺構からは陶磁器、土師器などの遺物が少量ながら出土しており、時期としては16世紀後半～末頃のものを含んでいる。

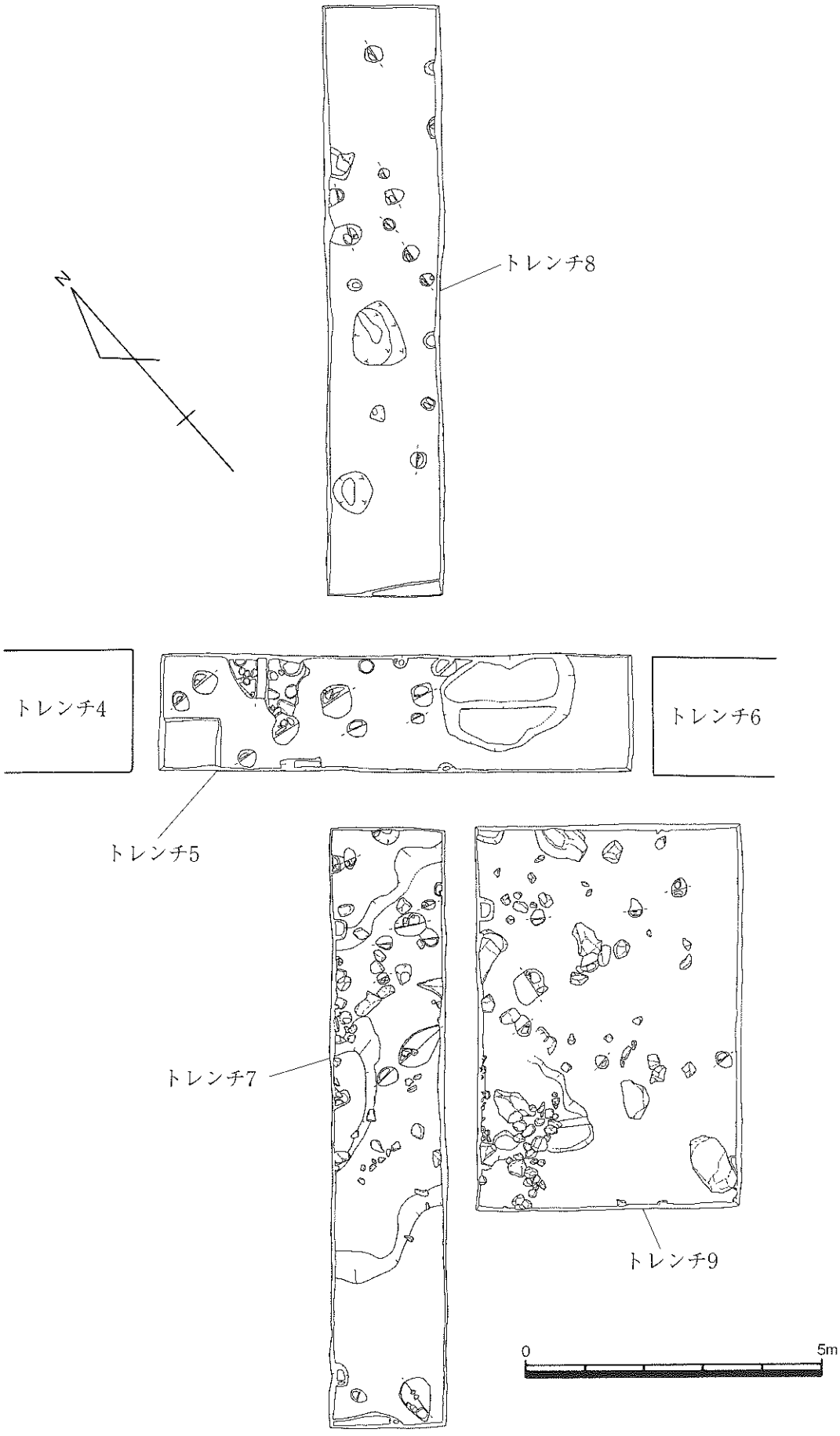
(3) 検出遺構（第19～23図）

SX－01

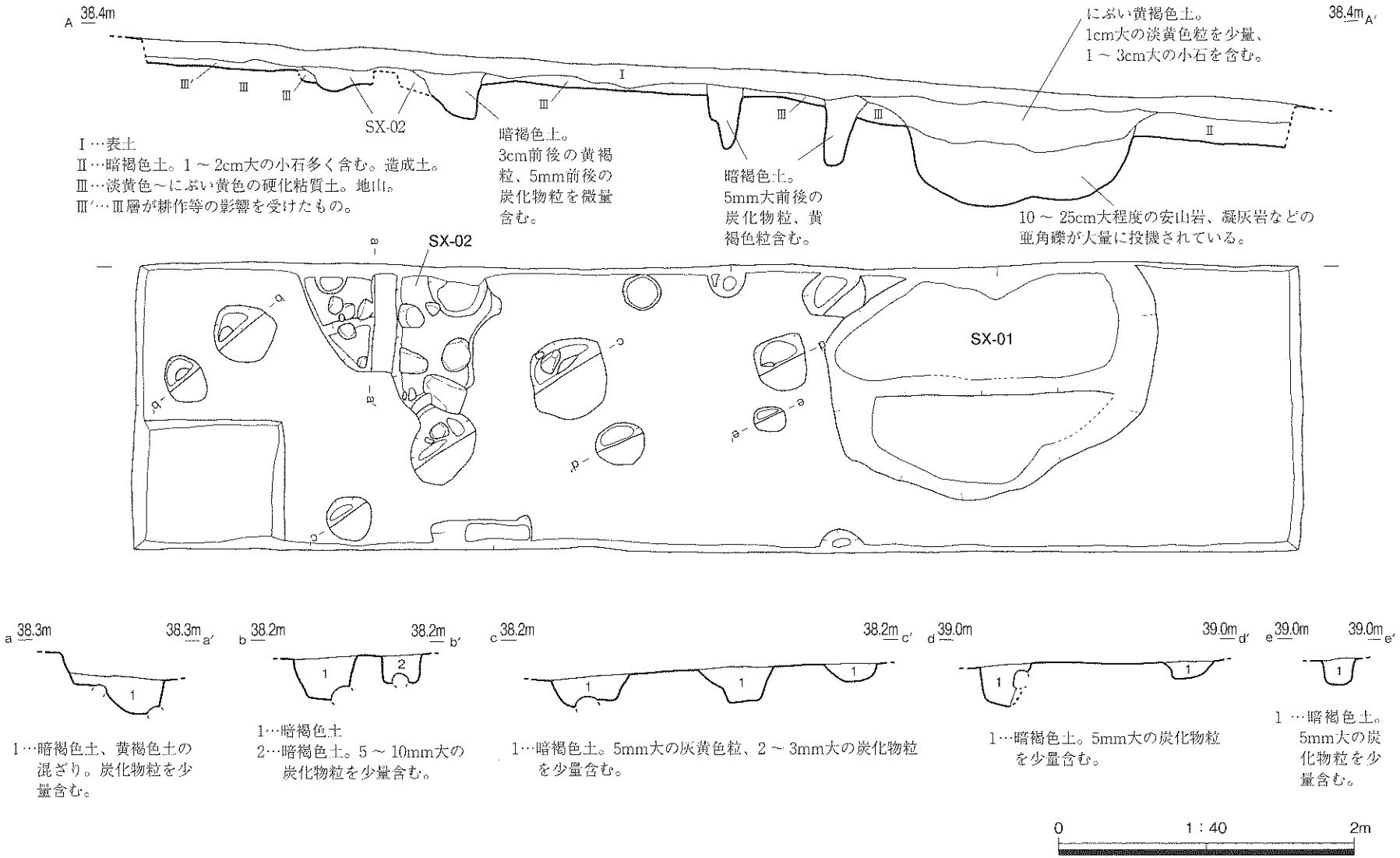
トレンチ５において検出した大型の土坑である。長軸が約2.2m、短軸は調査区外となるが1.6m程度になると思われる。深さは約70cmである。埋土の下層部分は10cm～25cm程度の亜角礫が詰まっており、礫の間には間隙がみられる。遺物は出土していないが、畑地を造成した際の土砂と考えられるⅡ層を切り込んでいる事から、近現代の遺構と考えられる。

SX－02

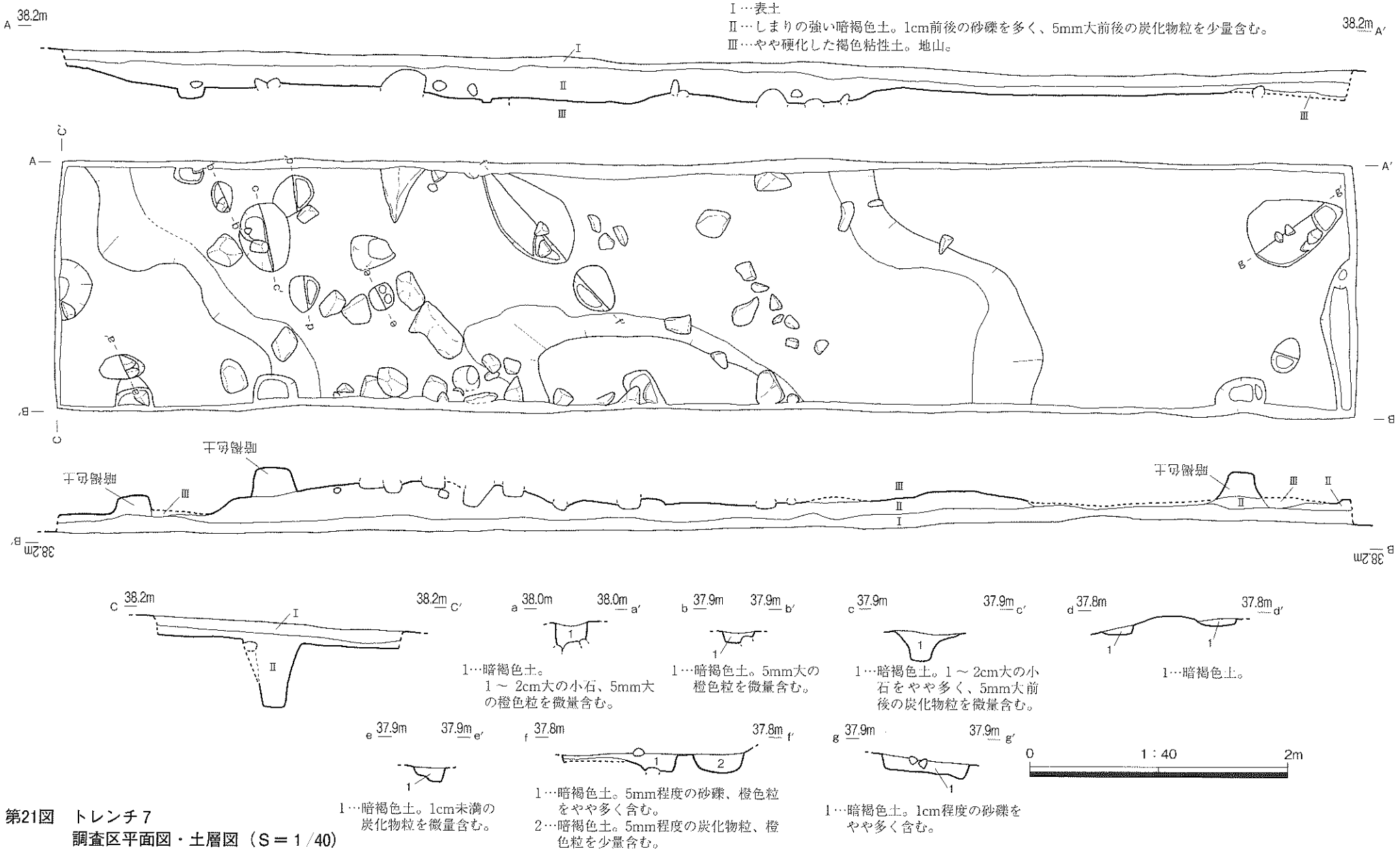
トレンチ５で検出した不整形の土坑状の遺構である。北西－南東方向の長さが約1.2mである。一



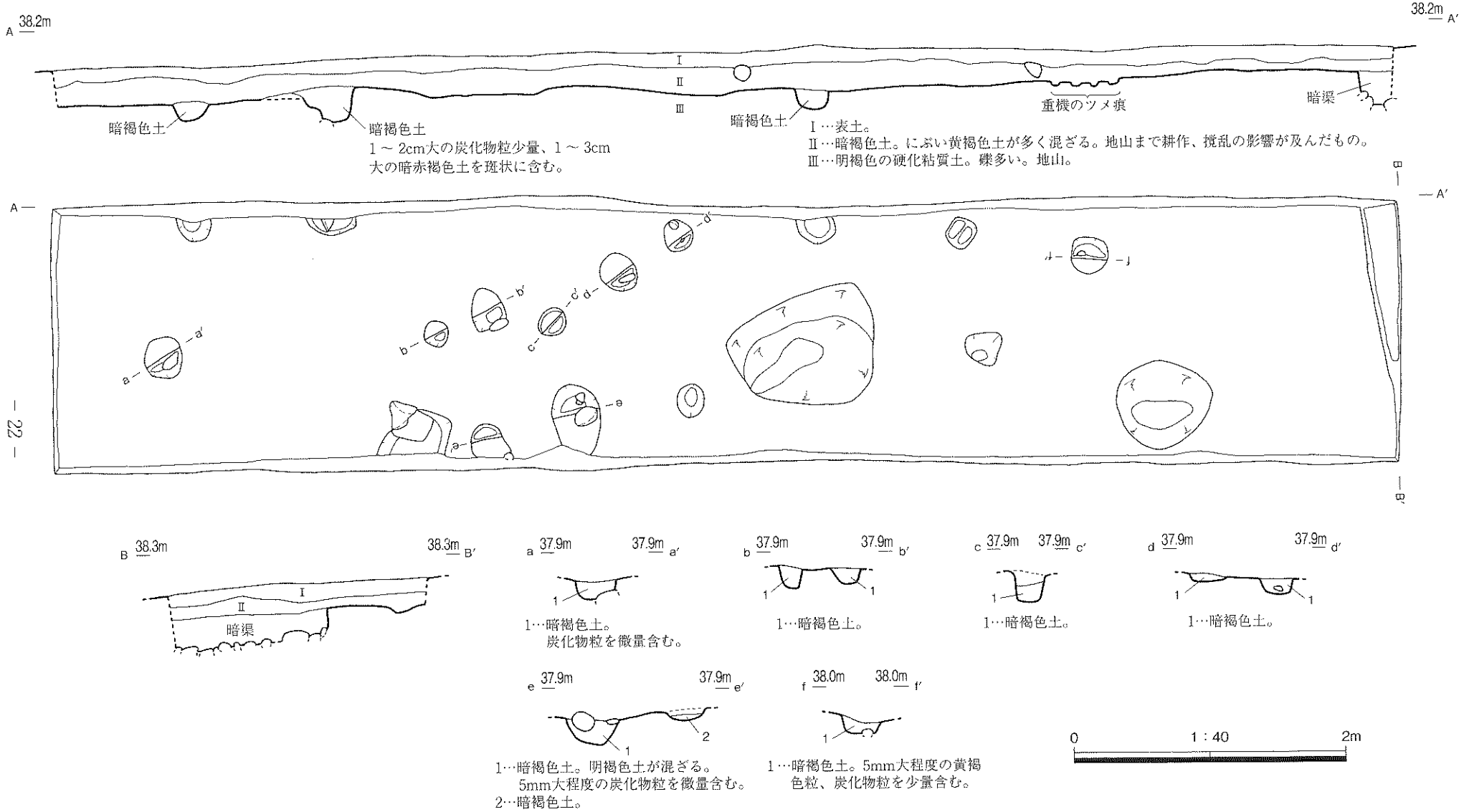
第19図　遺構等配置図（S＝1／100）



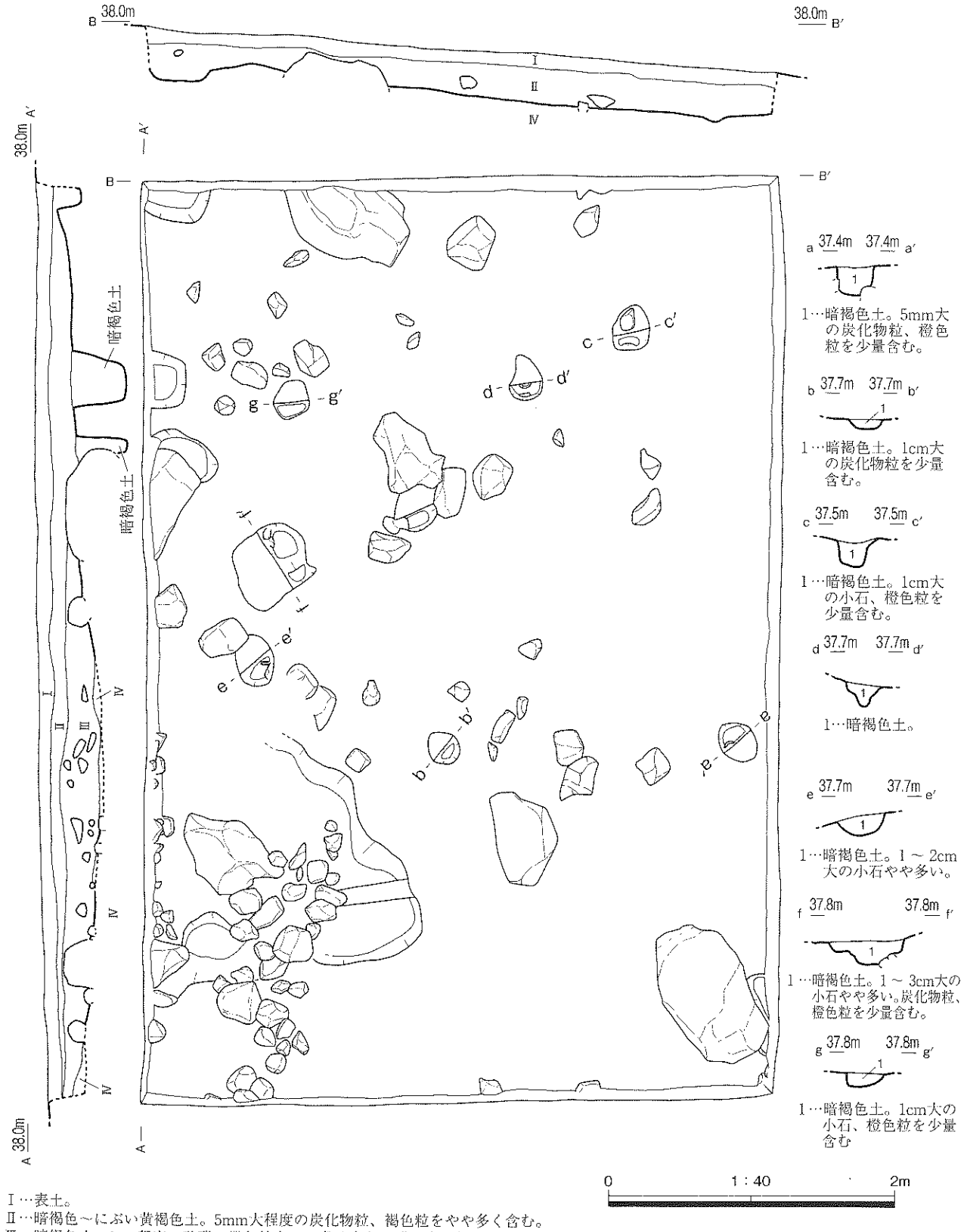
第20図　トレンチ5　調査区平面図・土層図（S＝1/40）



第21図　トレンチ7
調査区平面図・土層図（S＝1／40）



第22図　トレンチ8　調査区平面図・土層図（S＝1/40）



Ⅰ…表土。
Ⅱ…暗褐色～にぶい黄褐色土。5mm大程度の炭化物粒、褐色粒をやや多く含む。
Ⅲ…暗褐色土。1cm程度の砂礫、橙色粒をやや多く含む。浅い窪地状となる箇所で人頭大、拳大程度の礫が多い。トレンチ7のⅡ層に概ね対応。
Ⅳ…明褐色の硬化粘質土。礫多い。地山。

第23図　トレンチ9　調査区平面図・土層図（S＝1/40）

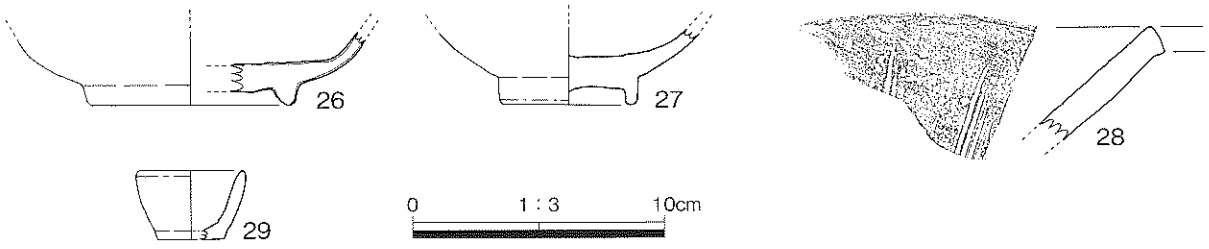
部ピットに切り込まれるが、残存する遺構の深さは10～15cm程度である。

ピット

トレンチ４、５、７～９において40基余りを検出した。基本的に円形ピットであり、直径30cm前後のものが多く、一部で直径50cm程度とやや大きめのものも見られる。調査範囲との関係もあり建物プランは確認できなかったが、残りのよいトレンチ５などの状況をみると、おおむね東西南北の方位軸を意識してピットが配列されていると考えられる。16世紀後半台頃の遺物片を含むものも一部あり、調査地点が日野江城と同時代に利用されていた事を示すといえるだろう。

(4) 出土遺物（第24図、表２）

26は青磁碗の底部である。龍泉窯系と考えられる。底部の復元径が約7.8cmと大きめであり、腰の張りが強い。内面見込みが釉剥ぎとなっている。27は陶器碗の底部である。体部から内湾気味に口縁へと向かう器形である。内面見込み部分が釉剥ぎである。28は瓦質土器の擂鉢口縁部である。直線的に開く器形であり、口縁端部は面取りする。端部直下の外面側はロクロ押さえにより、ややへこむ。擂目はヘラによるものであり少ない本数で単位をなす。擂目の上端は引きっぱなしである。29は土師器の小坏である。



第24図　出土遺物（S＝1／3）

表２　日野江城二ノ丸北側地点　出土遺物観察表

図	番号	出土箇所	種別	器種	生産地	文様・特徴など 内面	文様・特徴など 外面	備考
24	26	トレ７・Ⅱ	磁器	碗	中国	見込み釉剥ぎ		底径7.8cm（復）
	27	トレ７・Ⅱ(ピット上面)	陶器	碗	肥前	見込み釉剥ぎ		底径5.2cm
	28	トレ７・Ⅱ(ピット上面)	瓦質土器	擂鉢	肥前	擂目引きっぱなし	口縁横ナデ	
	29	トレ７・ピット内	土師器	小坏	在地	ナデ	ナデ	口径4.1cm(復)　底径2.1cm(復)

(5) 調査のまとめ

日野江城跡の本丸および二ノ丸に対峙する丘陵先端部において、16世紀後半頃と考えられる遺構・遺物を検出した。調査地点の性格付けにあたっては、日野江城との距離や位置関係などを踏まえて整理する必要がある。

調査地点と本丸との間には竪堀状の谷が走っており、これを城域の区画とみるならば、今回の調査地点は城外と位置付けられる。調査地点は本丸と二ノ丸を眺望できる場所であることから、城の防衛において重要な地点であったと考えられる。物見台としての役割を持っていた可能性は高いと思われる。

ピットなどの遺構や遺物がみられるため、調査地付近では一定の長期滞在が行われていた事が判った。内容や規模はまだはっきりとしないが、居住空間として利用されていた可能性もある。その広がりと時間幅の確認を進めていくことが今回調査を行った丘陵部での調査課題の一つとなるだろう。

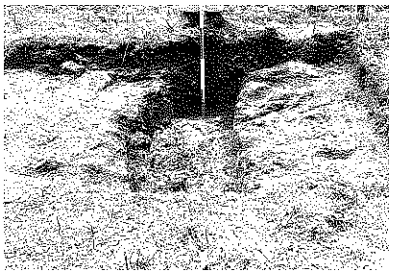


写真23　トレンチ1調査状況(東より)

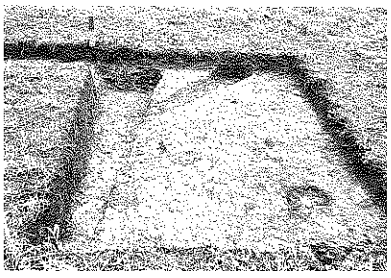


写真24　トレンチ2調査状況(南より)

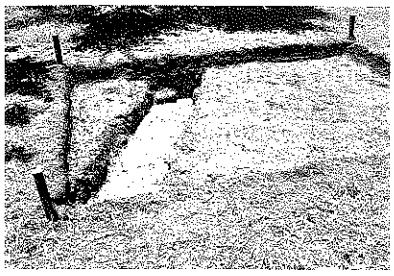


写真25　トレンチ3調査状況(北より)

写真26　トレンチ4～9付近　調査前（東より）

写真27　トレンチ4調査状況（東より）

写真28　トレンチ5調査状況（北西より）

写真29　トレンチ5・SX－02付近（北東より）

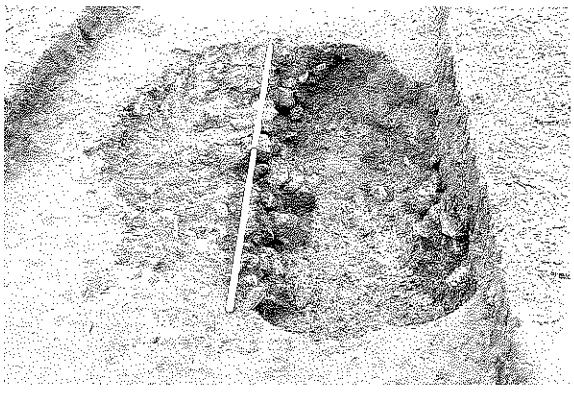


写真30　トレンチ5・SX－01半載状況（南東より）

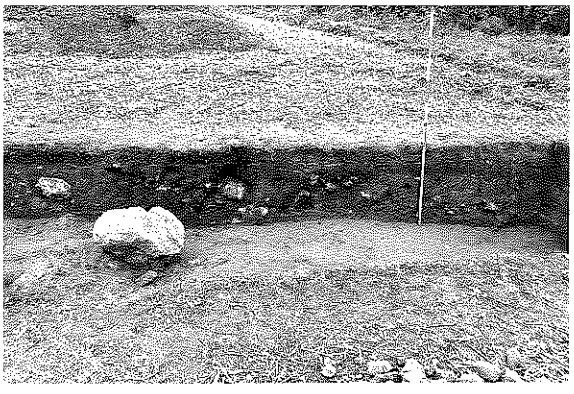


写真31　トレンチ6調査状況（南西より）

写真32　トレンチ７調査状況（北東より）

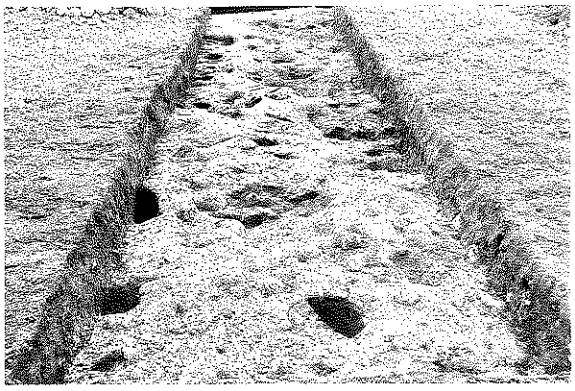


写真33　トレンチ８調査状況（北東より）

写真34　トレンチ９調査状況（南より）

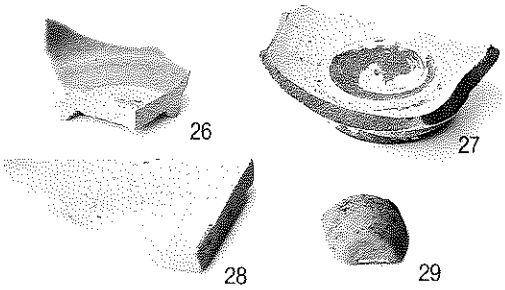
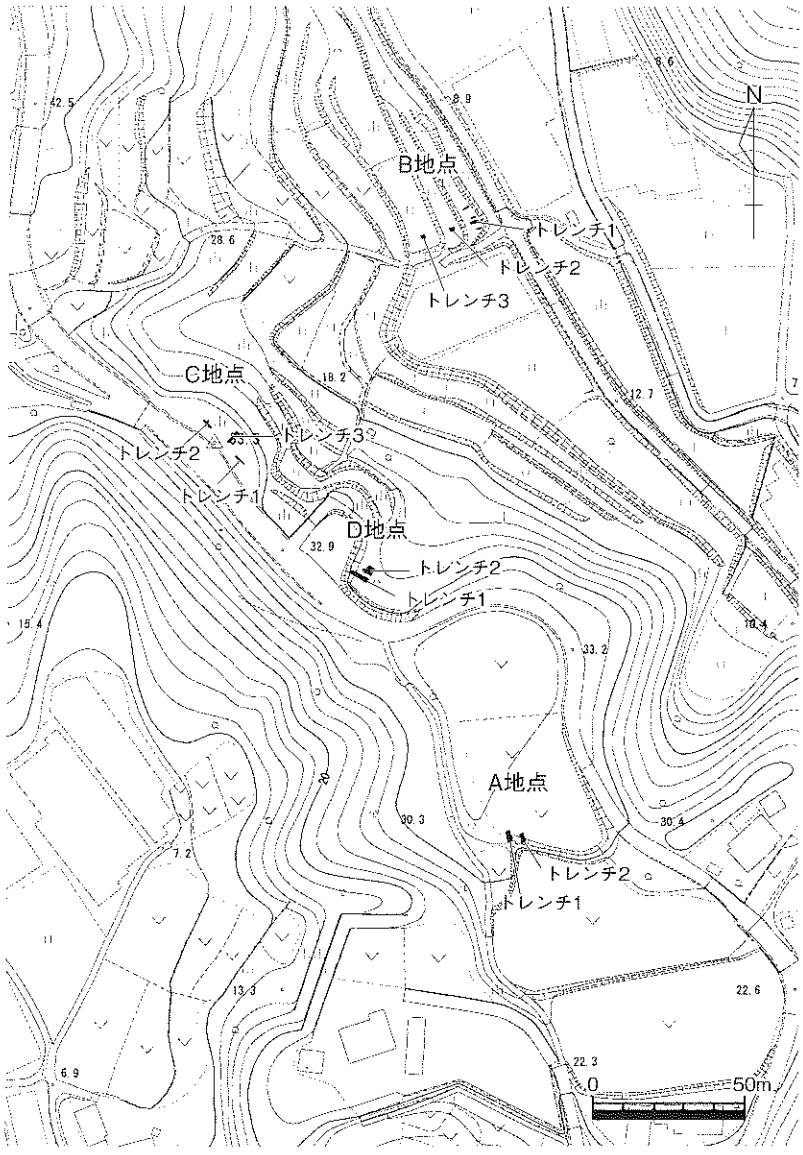


写真35　出土遺物

写真36　調査地点より日野江城跡を望む

5．幕府軍陣跡推定地（試掘調査）

所 在 地
南島原市南有馬町乙2633番地
1ほか4筆
調査期間
平成23年7月25日～
平成23年10月7日
調査面積　74.5㎡



第25図　調査区の位置（S＝1/2,500）

(1) 位置と環境

国史跡原城跡より国道251線を挟んで西側に展開する低丘陵群は、寛永十四年(1637)から翌年にかけて起こった島原天草一揆の際に、幕府方の連合軍が陣を構えた場所であることが文書・絵図等の史料により判っている。今回の調査地点は、およそ幕府軍が展開したと考えられる範囲の南端付近であり、延岡より参戦した有馬左右衛門佐（きえもんのすけ）の陣と推定される箇所である。原城跡本丸付近からの直線距離は1km余りである。なお当時の延岡藩主は当地より転封となった有馬直純であり、直純自身も旧領の地理に明るいこと等から一揆の制圧戦に加わったとされる。

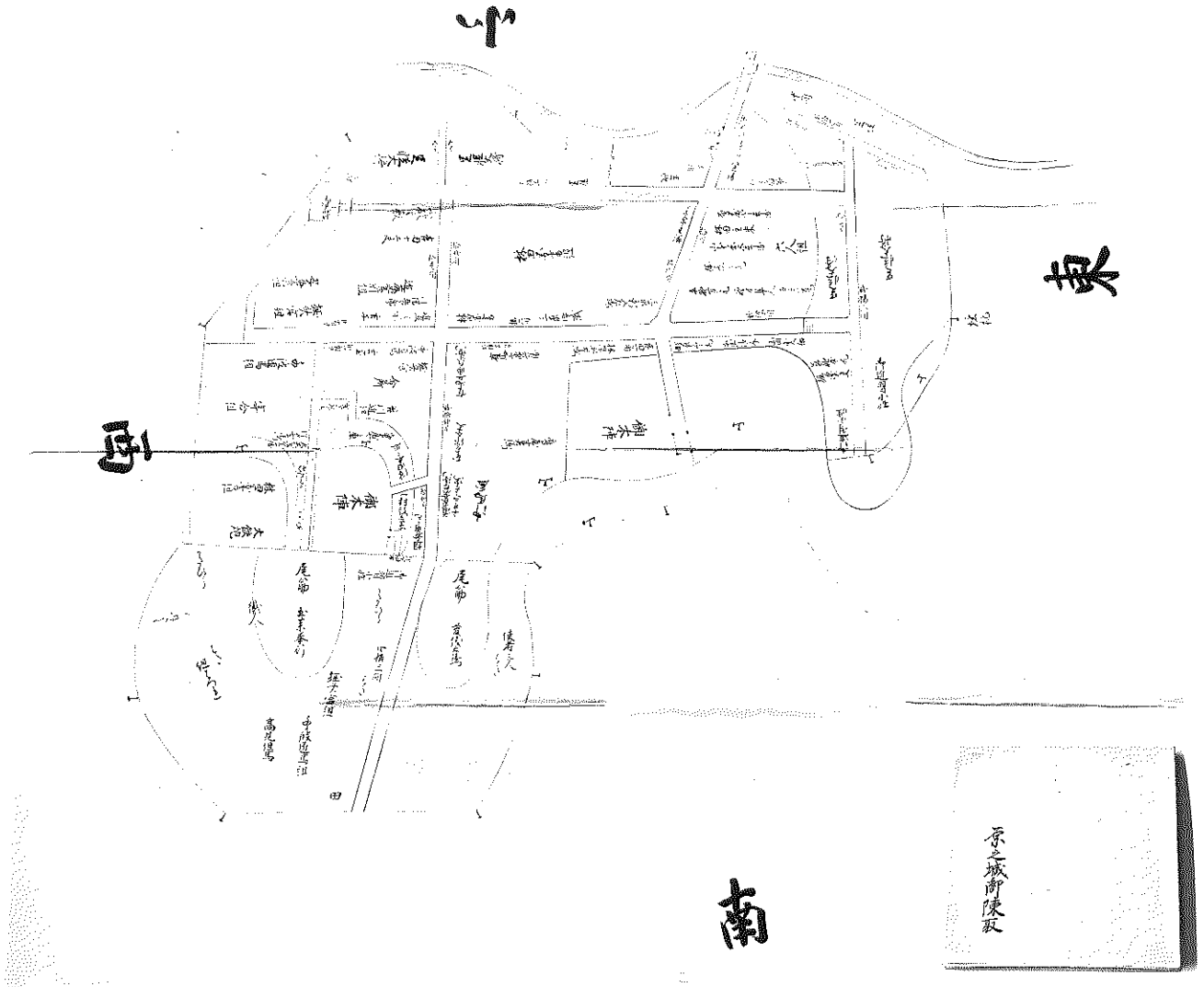
(2) 調査の概要

詳しい由来は不明だが、近年『原之城御陳取』と裏書きのある古図を市で購入しており（以下「御陣取」という。※4）、一揆当時における調査地付近の情報が記載されている（第26図）。今回調査は御陣取の記載情報を基に、現況地形との対応が認められる地点を4箇所選定し、遺構等の確認にあたった。

各地点は便宜的にA～Dのアルファベットを付して取り扱った。A、C、D地点は標高30m前後の尾根筋の畑地などである。B地点は田町川に沿う段畑の一角であり、標高は10m余りである。

調査方法はいずれもトレンチ調査であり、人力掘削による遺構、遺物の確認にあたった。

※4…裏書きには「陳」と書かれているが、「陣」の意と考えられる。



第26図　『原之城御陳取』

＜A地点＞

「御本陣」と書かれた空間の南東隅に門を示す記号が見られたため、確認を行った。現況は畑地である。4m×2mおよび3.5m×1.5mのトレンチを各1箇所、畑の縁の斜面に掛かるような形で設定した。調査の結果、A地点は著しく削平を受けており遺構等の確認には至らなかった。発掘調査後に実施した航空測量と旧地形図の比較（第4章第4節参照）においても、同地点の削平状況が確認された。

＜B地点＞

「御番所」の記載のみられる付近での調査を行った。田町側ほとりの段々畑であり、標高は10m前後と他地点より低い位置である。2m×2mのトレンチを3箇所設定して調査を開始したが、最も東側のトレンチ1では遺構と思われる状況があったため、拡張、および周囲にサブトレンチを設けた。結果として畑の石積みを築いた際の影響によるものであり、遺構は確認できなかった。掘削の過程で近世陶磁器の細片がごく少量出土しているが、南西側の高所部より流れ込んだものと考えられる。

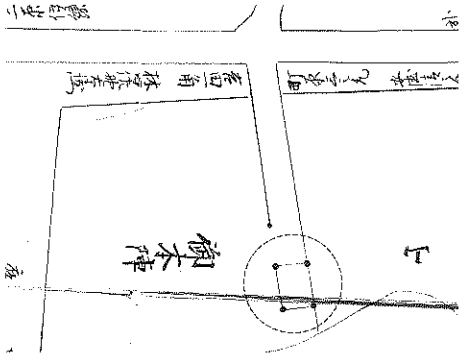
＜C地点＞

御陣取において、「山」と記された空間に「林田図書」という人名や「大鉄砲」の記載がみられる。現地形においても県道より北東の谷部に向かってテラス状に突き出した箇所があり、地形的特徴が類似している。北西－南東方向を軸とする1m×5mのトレンチを2箇所、北東－南西方向を軸とする1m×6mのトレンチを1箇所設定して調査を行った。造成の影響を受けているようであり、遺構は確認できなかった。近世陶磁器の小片がごく少量出土したが、島原天草一揆の年代よりは新しいものである。

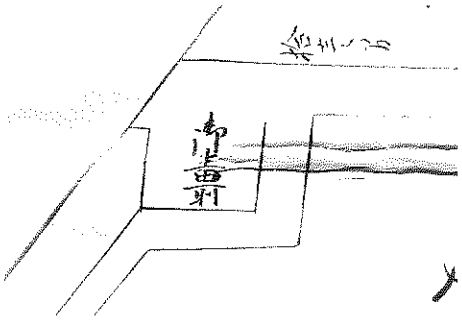
＜D地点＞

C地点の南東側に近接する箇所に、同様のテラス状の空間があり、平場の中央には「御本陣」と記されている。「山」の記載があり、現地形との特徴が類似している。

この地点の南東法面にあたる部分に、虎口および門と考えられる表記が見られたため、この確認にあたった。調査は2m×7mのトレンチを一箇所、3m×3.5mを基本とするトレンチを一箇所設けて行った。斜面部において地山を段状にカットした地形が一部みられたが、階段状の遺構

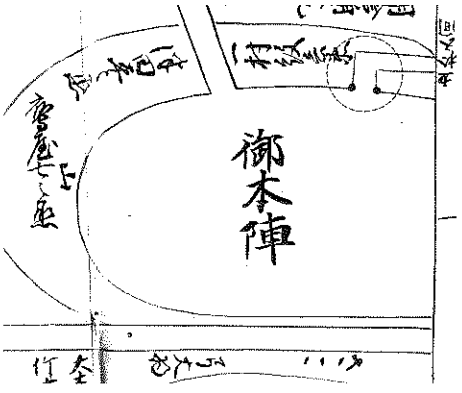


第27図　A地点「御陣取」より

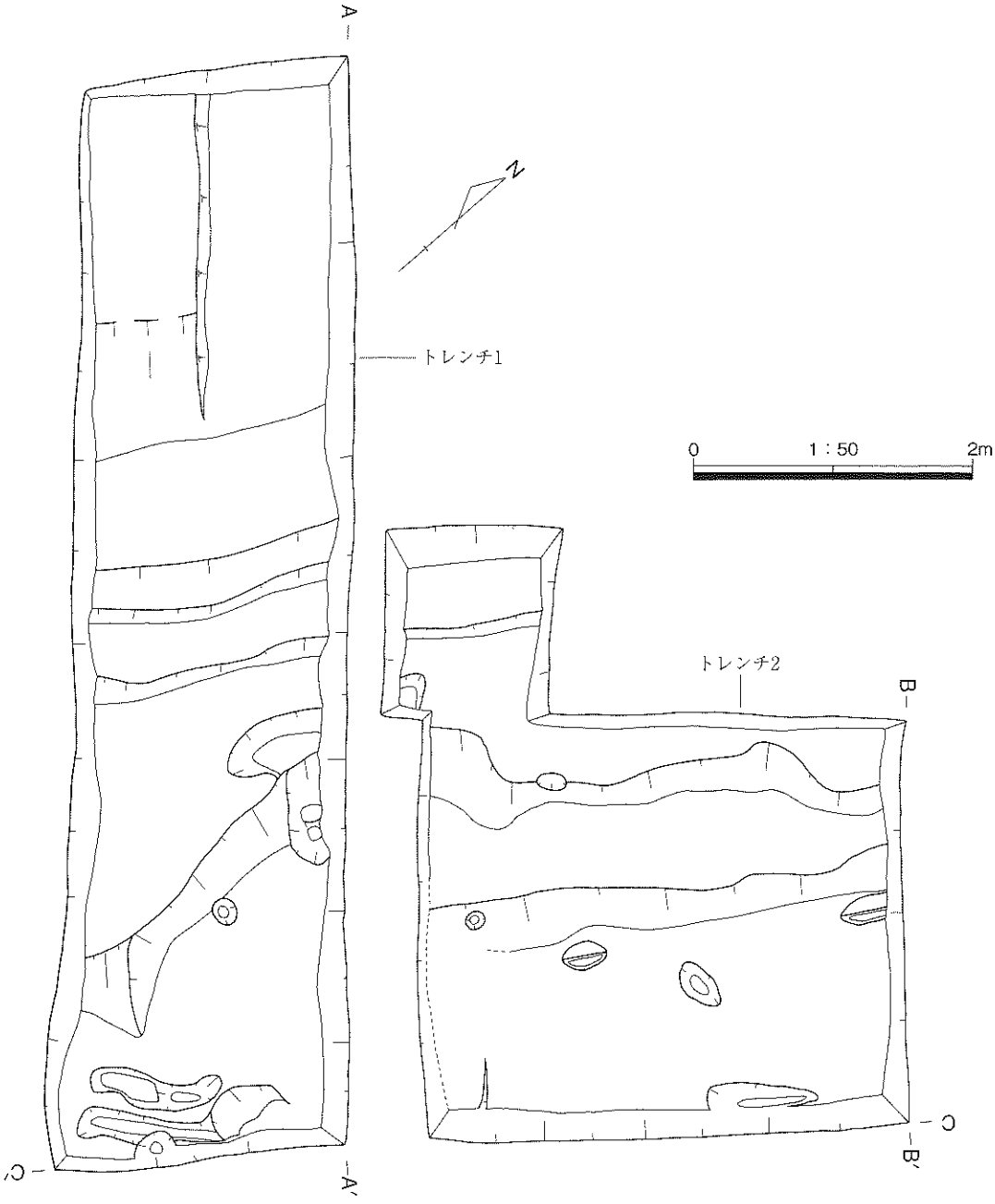


第28図　B地点「御陣取」より

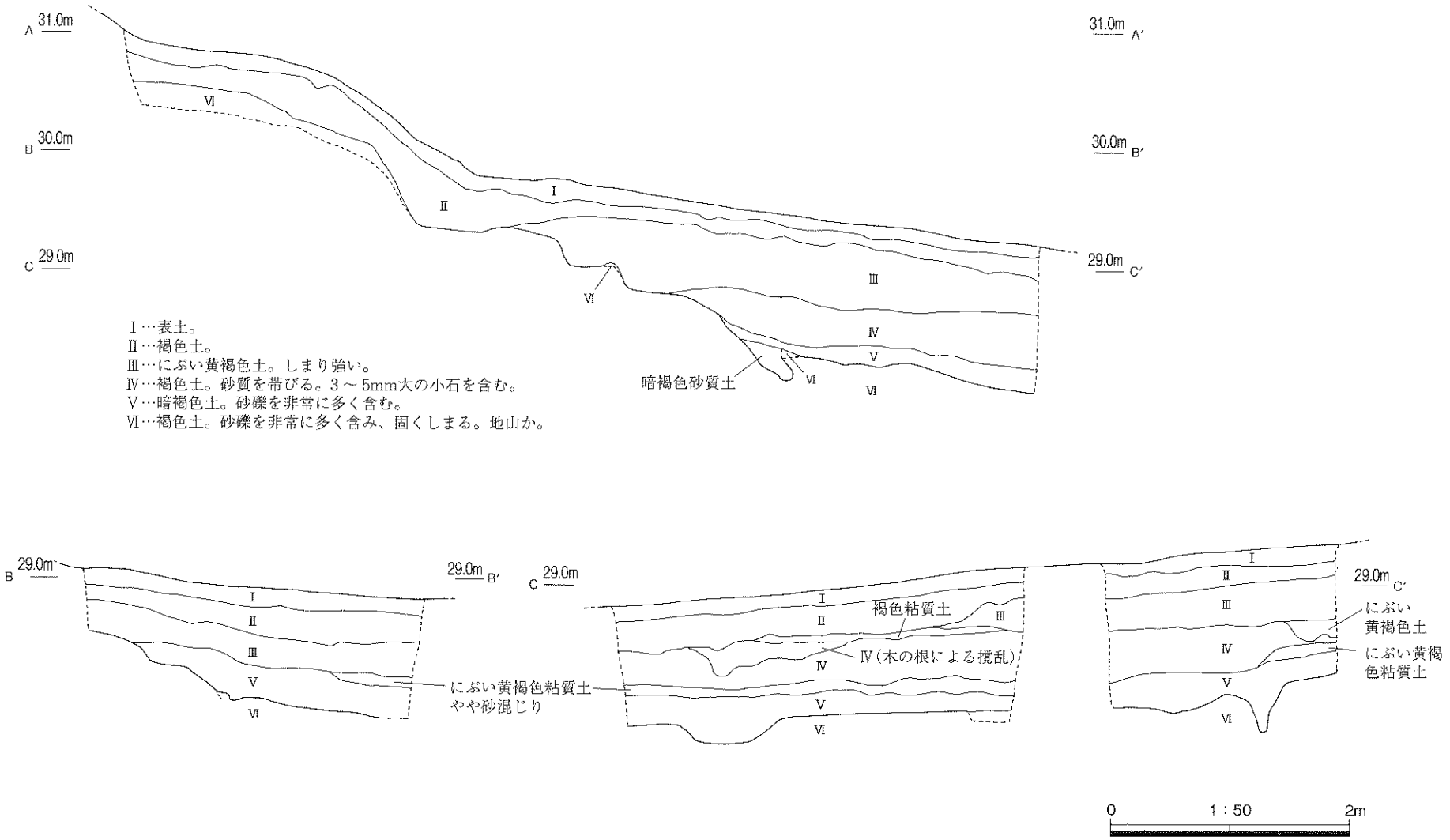
第29図　C地点「御陣取」より



第30図　D地点「御陣取」より



第31図　D地点試掘トレンチ平面図（S＝1/50）



第32図　D地点試掘トレンチ土層図（S＝1/50）

とするには踏面の幅や規格性などに問題点があり、またこの部分は表土系の土砂によって覆われているため、近現代の耕作等による影響の可能性もある。このほかピット状の掘り込みが数基みられたが、調査区全体を通じて遺物が出土していないため、一揆当時のものと断定するには至らない。なお調査区南東側の低位の土層は大量の水分を含んだ粘質土であり、地山に相当する土層は砂礫質の土層であった。調査区外の南東側一帯は以前にため池として利用されており、これと一連のものであったと考えられる。

(3) 調査のまとめ

絵図史料と現地形を参考とし、今回はじめて陣跡と推定される地域内で試掘調査を行ったが、結果として明確な遺構等は確認しなかった。陣が戦乱時の一時的施設であり、遺構や遺物が残りにくいという性格もあり、今後調査を進めるうえでの大きな課題点である。確認調査は今後も実施が必要であるが、遺構確認の有無によらずとも、史料の検証や測量成果との突合作業の結果をもって遺跡としての評価や保護を図る観点も備えておく必要があろう。

写真37　A地点トレンチ1調査状況（東より）

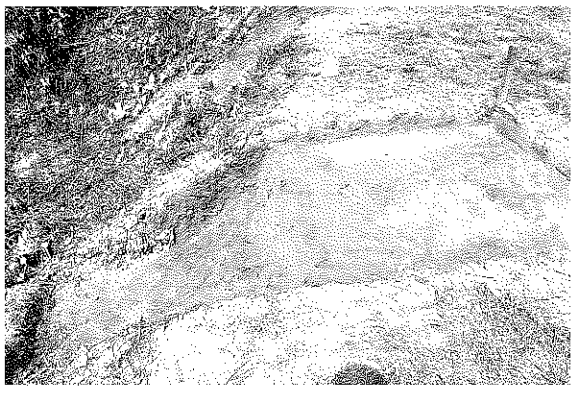


写真38　A地点トレンチ2調査状況（東より）

写真39　B地点トレンチ1調査状況（南西より）

写真40　B地点トレンチ2調査状況（南より）

写真41　B地点トレンチ3調査状況（南より）

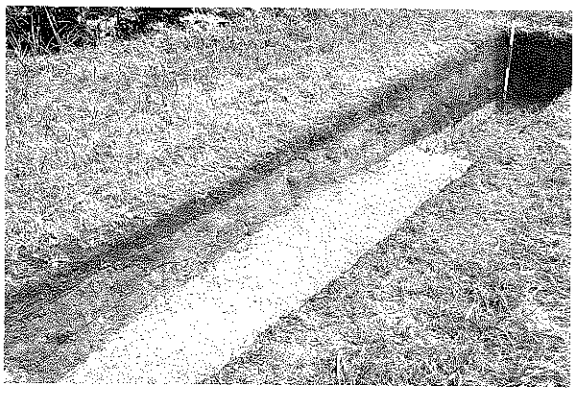


写真42　C地点トレンチ1調査状況（西より）

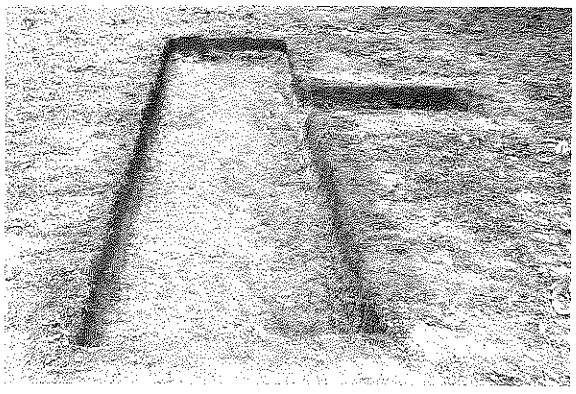


写真43　C地点トレンチ2調査状況（南東より）

写真44　C地点トレンチ3調査状況（南西より）

写真45　D地点調査状況（南より）

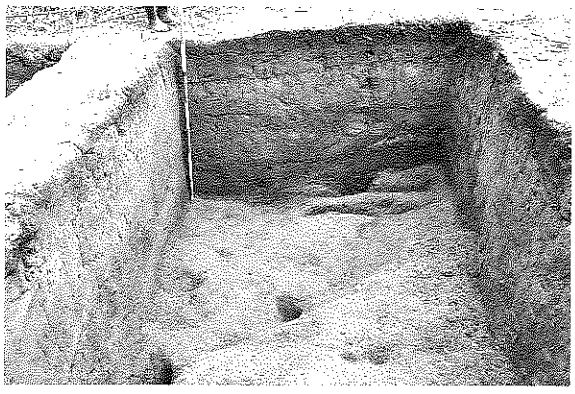


写真46　D地点トレンチ1南東側土層（北西より）

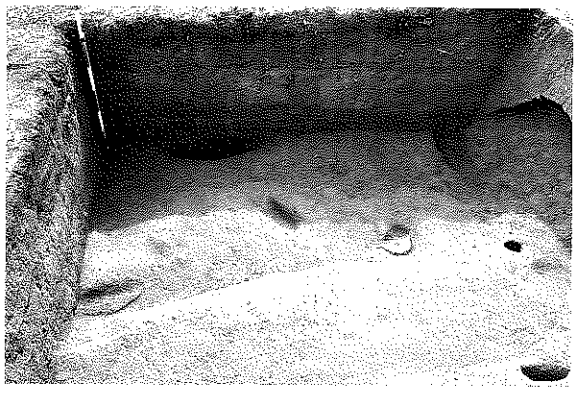


写真47　D地点トレンチ2調査状況（北西より）

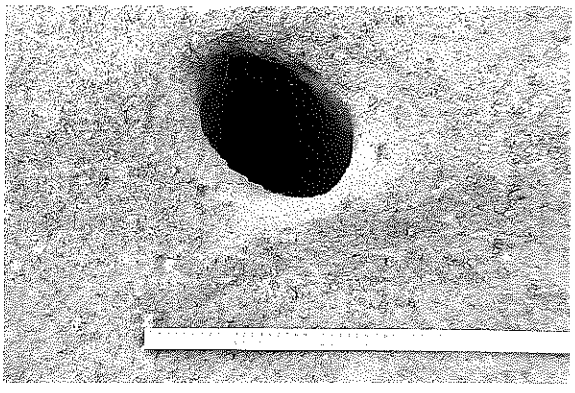


写真48　D地点トレンチ2ピット検出状況（南東より）

第４章　測量調査

対象地域　南島原市北有馬町　日野江城跡および周辺
　　南島原市南有馬町　原城跡、幕府軍陣跡推定地および周辺
調査期間　平成23年６月６日～平成24年２月17日
対象面積　約2.18㎢

第１節　調査対象地域の概要と目的

調査対象地域の概要について簡単にふれておきたい。日野江城跡は中世から近世初頭にかけて当地を支配した肥前有馬氏の居城跡であり、城は高岩山より南側に派生した丘陵の先端に築かれている。十あまりの曲輪よりなる群郭式の山城であり、史跡指定面積は約11万㎡である。16世紀後半段階には、城主の有馬義直や有馬晴信などがカトリックに改宗するともに、キリスト教を手厚く庇護していることから、キリシタン大名の城としても知られる。本丸および二ノ丸を中心とした過去の発掘調査によって、掘立柱建物、大型土坑、階段遺構、大量の瓦や土師器などを確認している。

原城跡は、日野江城の支城として築かれた城郭の跡である。有明海に突き出した丘陵台地の上に築かれており、標高30mほどの本丸を起点に、北に二ノ丸および三ノ丸、西に鳩山出丸、南に松山丸（天草丸）などの郭が展開している。史跡の指定面積は約42万㎡と広大である。本丸は総石垣を備えた造りで、慶長四年（1599）～同九年（1604）にかけて築造されたことが、当時の記録や発掘調査により明らかとなっている。寛永十四年（1637）から翌年にかけて起こった島原天草一揆に際し、一揆衆が籠城した城として広く知られている。平成４年度からの発掘調査では大量の瓦、陶磁器、人骨、キリシタン遺物などが出土しており、また徹底した石垣の破却状況などを確認している。

陣跡は一揆の際、原城を攻囲した地域である。その際の幕府連合軍の総数は約12万もの大軍であったとされる。おおむね原城跡より国道251号線を挟んで、西側に展開する丘陵群一帯が相当する。一揆に関する絵図史料等より、各陣と各丘陵の大まかな比定が可能となっている。埋蔵文化財としての包蔵地登録はなされていない。

今回調査対象地は、当地域における中世期の領地支配、16世紀後半～17世紀前半代におけるキリスト教の盛衰などと深く関わる地域である。特に島原天草一揆は以後の幕府の政策に影響を与えるなど、日本史の上においても重大な出来事であった。これら地域は本市の歴史を理解するうえで極めて重要な場所であり、適切な調査と保存活用を図っていかなければならない。その際、対象文化財等の地形情報が概ね地表に顕在化しているため、調査においては、この正確な把握がまず肝要であるとともに非常に有効な手段である。しかし前述のとおり調査対象地域は広大であり、地上での測量では期間、経費、測量図の連続性の確保など課題が多く、近年、文化財調査にも徐々に導入されている航空レーザー測量によって地形図の作成に今回取り組んだところである。

また、絵図史料等との地形比較を行う際、追跡が可能な限り当時に近い年代の地形情報を押さえておくことが必要である。今回、昭和22年（1947）に米軍航空機によって撮影された写真を取得し、これに基づいた地形復元作業を併せて行った。

第２節　航空レーザー測量

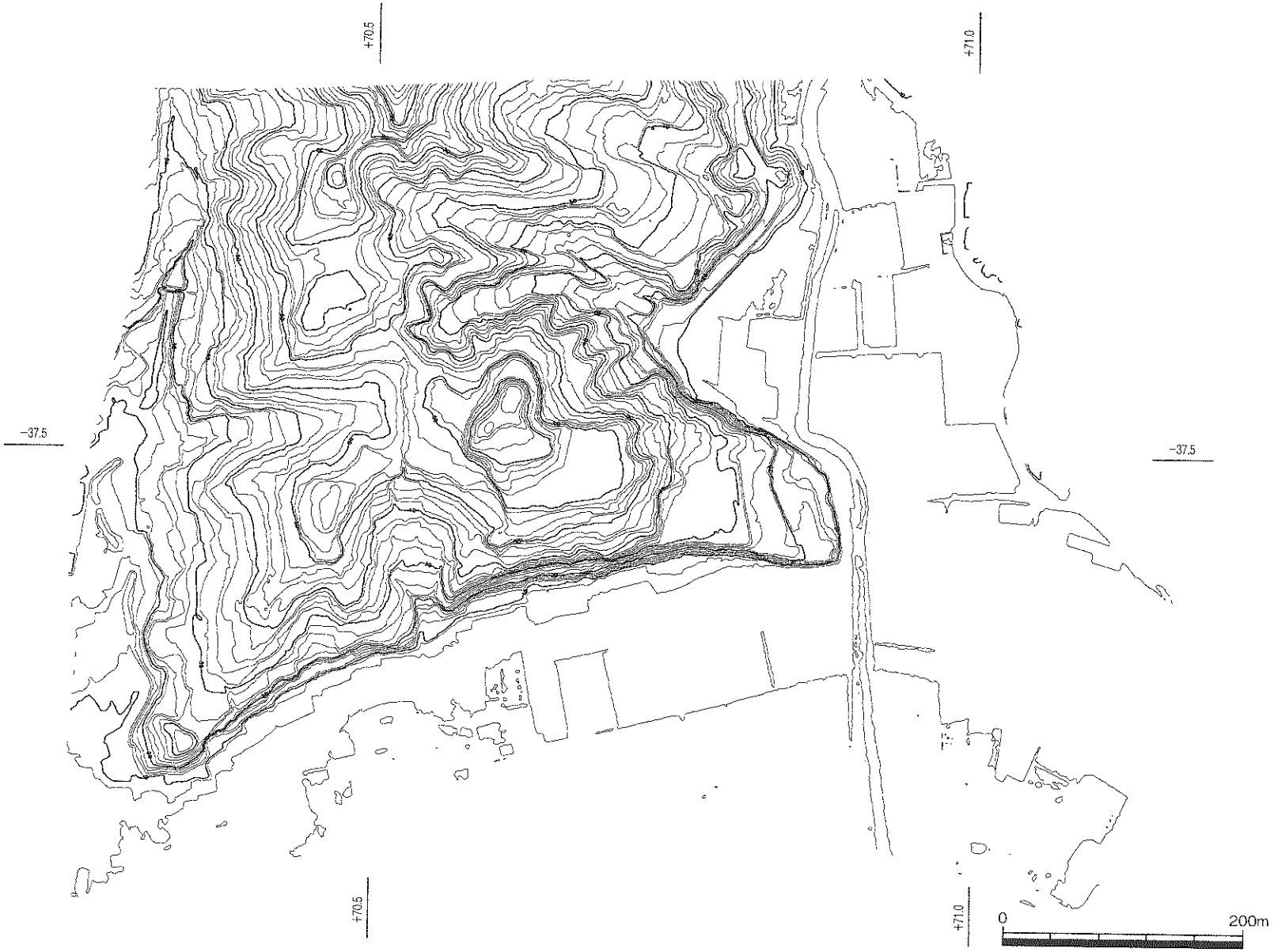
調査の概要

前節に述べた目的に沿って、日野江城跡、原城跡および陣跡を含む地域において航空レーザー測量を実施した。原城跡と陣跡は距離的に近接しており、また島原天草一揆の際における関係が密であるため一体の測量図としている。日野江城跡も原城の本城跡であり極めて密接な関係であるが、直線で４km程度の距離が離れており、測量図としては別作成とした。

航空レーザー測量であるが、広範な地域の地形情報を高精度で取得できるという特徴があり、古墳や山城など地形情報が地表に顕在化する文化財の調査にも徐々に導入されている。

測量業務はアジア航測株式会社長崎営業所に委託し、実機ヘリによる測量を行った。固定翼機に比べて回転翼機（ヘリ）は低速飛行が可能であり、より多くの点群データを取得しやすく文化財調査には向くとされる。測量対象とした地域および計測コースは第33図のとおりである。測量によって得られた点群データは、建造物や樹木などの地物をフィルタリングし、より正確に地形情報が把握できるよう処理を行っている。第34～37図は、今回の測量成果データを等高線図および赤色立体地図により出力したものである。なお、測量成果図については巻末にもPDFデータを付しているので併せて参照されたい。

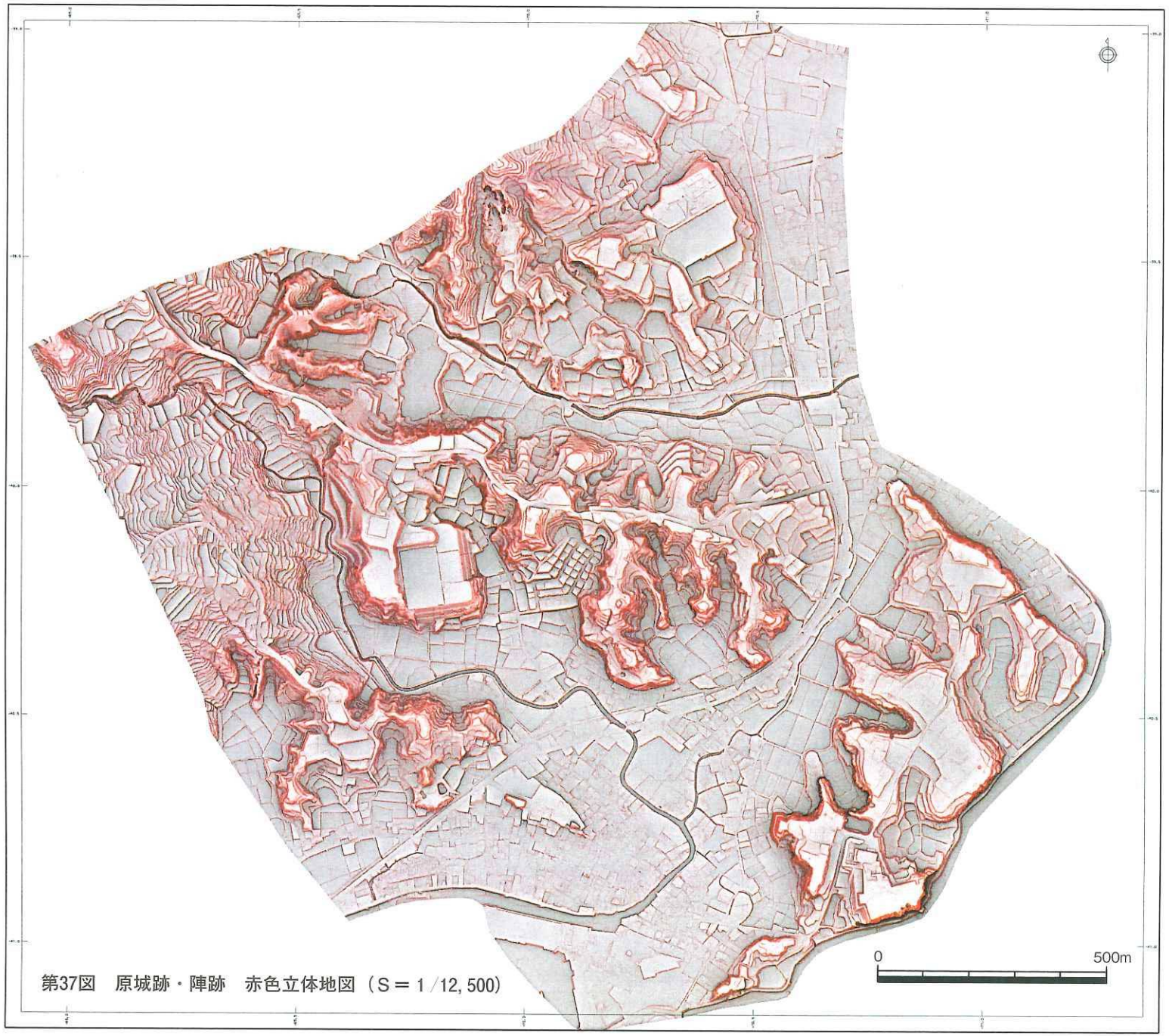
第33図　航空レーザー測量ルート



第34図　日野江城跡　等高線図（S＝1/5,000）

第35図　日野江城跡　赤色立体地図（S＝1/5,000）

第36図　原城跡・陣跡　等高線図（S＝1/12,500）



第37図　原城跡・陣跡　赤色立体地図（S＝1／12,500）

第３節　空中写真測量

調査の概要

前節における航空レーザー測量の対象範囲と同範囲について、1947年の航空写真に基づく旧地形の復元図作成を行った。使用した航空写真は第二次世界大戦後、日本を占領していた米軍の航空機により撮影されたものである。当時の撮影目的が占領地の情報収集であるため、撮影箇所が重なりをもつ程度に細かいピッチで撮影されている。調査手法であるが、測量対象地に対し、こうした重なりを持つ複数の写真を用い立体視によって作成した。測量精度は約１/2,500であり、作業はアジア航測株式会社長崎営業所に委託した。第38図、第39図は測量成果図である。日野江城跡に係る第38図では、西側において等高線が途切れた表現となっている箇所が一部ある。これは資料写真の限界により、ステレオモデルの構築による数値図化が行えなかった部分である。

第４節　測量成果の比較

第２節、第３節で作成した赤色立体地図及び旧地形図を同縮尺で合成し、比較を行った（第40図、第41図）。赤色立体地図と旧地形図の整合が取れていない箇所は、1947年から現在に至るまでの間、自然災害や開発など何らかの影響を受けて地形が改変された箇所である。原城跡および陣跡については絵図などが多く残るが、そうした史料との比較を行うに際しても不可欠な情報である。大きな地形改変の認められる箇所については、遺構等の残存があまり期待できないため、調査地点の選定にあたっても有益な情報となる。

一方、両図が整合している箇所は、1947年以降の地形改変が行われていない箇所であるため、各遺跡等が廃絶した当時の状況に近い可能性が相対的には高くなる。史料との直接比較、調査計画の立案、陣跡であれば文化財指定などの保護対策などが行いやすくなると言えよう。

合成図から地形変化の情報を概観すると、全体としては1947年当時に対して地形の残りが良いという評価ができる。原城跡及び日野江城跡については、史跡指定による現状変更の規制が一定の効果を挙げてきたものと思われる。史跡外の地域では大きな地形改変が起こっている箇所も若干見られる。

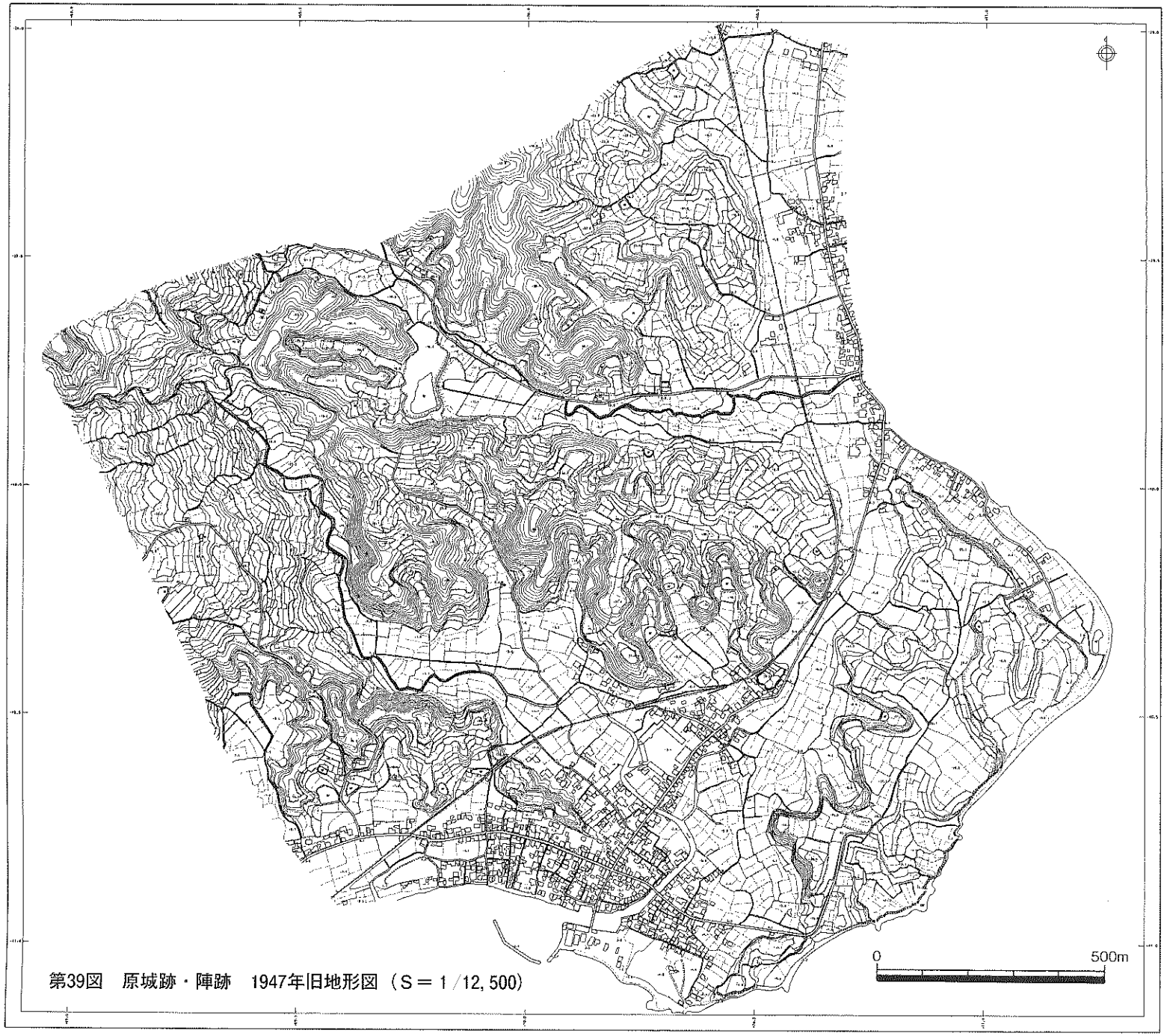
絵図等の史料と今回得られた合成図を、今後細かく比較検証していく必要があるが、ひとまずここでは大幅な地形改変の認められる箇所を確認しておきたい。

まず日野江城跡であるが（第40図）、ａ地点は本丸のうち最も広大な曲輪３の東辺にあたる。1947年当時に比べて大きく崩壊している状況がみられる。昭和57年の長崎大水害の際に崩壊したということである。現在は東側の二ノ丸方面より、この崩壊の跡を経由して曲輪３の南東隅付近に登ることができるが、旧地形をみると本丸と二ノ丸は急な崖斜面によって完全に分断されており、それぞれが空間的に独立して配置されていた事がよく判る。日野江城の構造を理解していくうえで非常に重要な情報である。

ｂ地点は日野江城跡の南側縁辺のほぼ中央付近である。現在は消失しているが、旧地形ではテラス風に張り出した空間がみられる。40mほど西側の谷筋は、二ノ丸東側が大手として利用される以前に大手道として利用されていた可能性があると考えられている。この張り出しが日野江城の構造の一部であったか、或いは旧大手と関係があったかについては不明だが、注意を払う必要のある地形情報であるだろう。

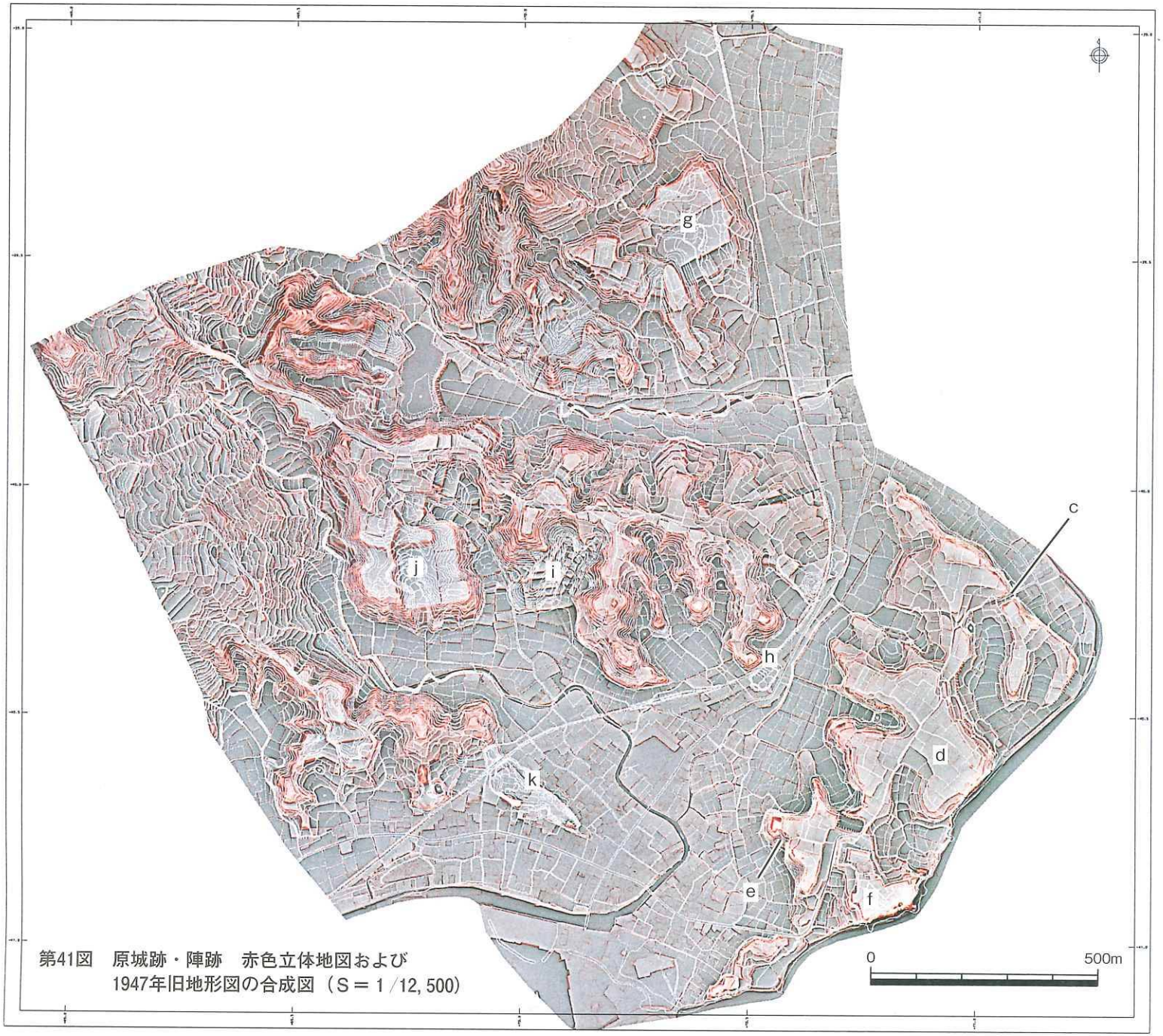
原城跡であるが（第41図）、昭和期における道路整備、農地改良事業などが行われており、その影

第38図　日野江城跡　1947年旧地形図（S＝1/5,000）



第39図　原城跡・陣跡　1947年旧地形図（S＝1／12,500）

第40図　日野江城跡　赤色立体地図および1947年旧地形図の合成図（S＝1/5,000）



第41図　原城跡・陣跡　赤色立体地図および
1947年旧地形図の合成図（S＝1/12,500）

響が図からも一部読み取れる。c地点は大手口付近であり、道路の路線替え、拡幅等によって切り通しがやや広くなっている。d地点は東二ノ丸である。昭和40年代に農地改良が行われているが、全体的な削平であるため平面図の比較では、やや変化が読み取りづらい。e地点は鳩山出丸と呼ばれる郭の一角であるが、崖面の崩壊が進行した状況がみられる。f地点は本丸跡である。平成に至ってからの発掘調査により現在は石垣の塁線が明瞭だが、以前は完全に土砂で覆われていたことがよく判る。

第42図　原城跡本丸崖面の経年崩落

第42図は本丸の海側崖面を拡大したものである。原城跡が立地する台地はAso-4火山灰などを主とした脆弱な地盤であり、図からも経年的に崩落が進んだことが窺える。崖面の崩落対策については史跡整備事業で現在取り組んでいるところであるが、こうした航空測量を定期的に行い地形変化の把握を行うことで、史跡の保存対策にも大いに活用できるものと思われる。

陣跡は日野江城跡、原城跡に比べると地形が大幅に変化している箇所が多い（第41図）。g地点は旧有馬商業高校の跡地であり大規模な造成が確認できるが、島原天草一揆の際には幕府軍の本陣が構えられたとされる場所である。h地点は幕府軍の西楼が置かれていたと考えられる付近である。丘陵先端が国道251線より南東側において消失している。残存する丘陵先端頂部は鐘掛け松と呼ばれており、警鐘が設置されていたと思われる。消失している箇所は築山という地名であり、人工的な盛土が行われていた可能性もある。現状においても原城と最も距離が近くなる付近だが、実際にはさらに近く100m余りの近距離で両勢の最前線が対峙していたことが分かる。i地点は丘陵が造成され宅地が形成されている。j地点は広い高台であり、原城文化センター、グラウンド、体育館、武道館、テニスコート、プールなど市の施設が集中している箇所であるが、二つに分かれた丘陵間の谷部を造成によって埋める事で形成した様子が判る。i地点、j地点いずれも鍋島氏が陣取ったと考えられる一帯である。k地点は市の南有馬庁舎（旧南有馬町役場）が建つ付近である。細長い丘陵が開かれ、先端と南西側の一部がわずかに残る。一揆時には寺沢氏の陣が構えられていたと考えられる付近である。

大まかではあるが、航空測量図と旧地形図の比較における差異を概観した。上述のように日野江城跡と原城跡については史跡指定を受けており、城跡としての認識もあることから比較的良好に地形が保存されてきた感がある。一方、陣跡については遺跡としての登録がないこともあり、全体観としてはその地形を留めつつも、部分的には大きく開発の影響を受けている箇所も見られた。一揆時における各陣と現況地形は概ね対比がなされているが、今回確認した地形改変の情報も踏まえて精度を高めていく必要がある。本報告ではそこまで踏み込むに至っていないが、次の課題として挙げておきたい。

陣跡であるが、島原天草一揆の際の一時的施設という性格から、必然的に遺構や遺物が残存しにくく、そうした点も陣跡が遺跡として登録されてこなかった背景にはあると思われる。今回調査で得られた成果も十分に活用しながら、日野江城跡および原城跡と歴史的関わりの深い地域として、今後の保護対策を講じたい。

第5章　総　　括

国史跡の城跡である日野江城跡および原城跡の周辺地において、確認目的での発掘調査および測量調査を平成22年度から平成23年度にかけて実施した。今回調査の対象地は、およそ「有馬の城とその周辺域」といった共通項で結びつけられる地域である。ようやく着手に至ったという感もあるが、ほとんど調査の及んでいなかった日野江城跡と原城跡の周辺において調査を実施し、一定の情報を得ることができた点は成果である。

日野江城跡南側で実施した日野江町遺跡の調査においては、旧海浜が現在よりも大きく入り込んでおり、日野江城から100m程度の距離まで接近していた状況を確認した。日野江城が機能していた年代における周辺環境の重要な情報であり、史料等にみられる様子にも裏付けを与えるなど一定の成果であったと言えるだろう。

日野江城跡の曲輪12の調査においては遺構、遺物を確認しなかった。地形的には、周囲に対して相対的に標高が高く、東西から入り込む竪堀状の谷内部を見下ろせる位置にある。北側からの外敵の侵入などを想定した場合、物見台としては格好の位置条件にあるだろう。その場合、居住空間ではないため遺構や遺物が残りにくい点への配慮も必要である。現在、史跡指定の範囲外であるが城全体の空間構造を踏まえた評価と取り扱いを行っていくべき箇所だろう。

日野江城城下地区遺跡で実施した範囲確認調査においては、あまり大きな成果は得られなかった。遺跡範囲が広いため、今後機会を得ながら内容確認と遺跡範囲の絞り込みに努める必要がある。

二ノ丸北側地点において実施した調査では、ピットや16世紀後半頃のものを含む遺物などを検出した。民地であり作付け時期との兼ね合いなどから、調査箇所の評価付けを行うに必ずしも十分ではないが、一定の情報が得られた点は成果である。本丸および二ノ丸の位置する丘陵との間には竪堀状の谷があり、城外とみなすのが適当だろう。日野江城に関係する防衛上の機能をもった場所、家臣の居住空間など想定されるが、内容や規模について今後さらに検証が必要である。

陣跡で実施した確認調査においては十分な遺構や遺物の検出に至らなかった。本文でも述べたように、陣跡は遺構および遺物が残りにくい性格がある。史料と現地形の整合の認められる箇所に対しては今後も積極的に確認調査を実施し、測量調査の成果も総合的に評価しながら保存対策へ結びつけていく必要があるだろう。

日野江城跡、原城跡および周辺地で実施した二種の測量調査においては、正確な現地形の情報、1947年当時の地形情報、また合成比較による地形変化の情報を得ることができた。本報告では基本的な成果の紹介と概観のみに留まったが、今後の調査計画の立案、絵図史料等との比較作業、或いは遺跡の保存対策など幅広い活用を行うことのできる貴重な成果であったと言えよう。

全体としてみれば、この地域の歴史的評価を考古学的に検証していくには、まだまだ不十分であり、発掘調査等による情報の充実と、得られた成果を統合していく視点をもって当面は事業を継続していく必要があるだろう。

報告書抄録

ふりがな	しないいせき1
書名	市内遺跡1
副書名	
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	伊藤　健司
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地
発行年月日	西暦2013年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
日野江町遺跡	南島原市 北有馬町 戊2995－1、 戊2995－2	42214		32° 39′ 24″	130° 15′ 07″	20100822 ～ 20100903	16㎡	学術目的 試掘調査
日野江城跡 (曲輪12)	南島原市 北有馬町 戊1434イ、 戊1435－1、 戊1435－2	42214		32° 39′ 40″	130° 15′ 05″	20100802 ～ 20100903	23㎡	学術目的 試掘調査
日野江城 城下地区遺跡	南島原市 北有馬町 戊2197－1	42214	101－39	32° 39′ 37″	130° 15′ 17″	20110530 ～ 20110628	16㎡	学術目的 範囲確認 調査
日野江城 二ノ丸 北側地点	南島原市 北有馬町 戊2223、 戊2224、 戊2225	42214		32° 39′ 41″	130° 15′ 16″	20110628 ～ 20110728 20111104 ～ 20111216	136㎡	学術目的 試掘調査
幕府軍陣跡 推定地 (陣跡)	南島原市 南有馬町 乙2633番地1 ほか	42214		32° 38′ 00″	130° 14′ 27″	20110725 ～ 20111007	74.5㎡	学術目的 試掘調査

ふりがな 所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひのえまちいせき 日野江町遺跡	屋敷跡	近世	土坑	陶磁器	
ひのえじょうあと 日野江城跡 (くるわ 曲輪12)	城跡	中世 近世	－	－	
ひのえじょう 日野江城 じょうかちくいせき 城下地区遺跡	遺物散布地	中世 近世	－	陶磁器 土師器	
ひのえじょう 日野江城 にのまる 二ノ丸 きたがわちてん 北側地点	遺物散布地	中世	ピット 土坑	陶磁器	
ばくふぐんじんあと 幕府軍陣跡 すいていち 推定地 (じんあと 陣跡)	陣跡	近世	－	陶磁器	

南島原市文化財調査報告書　第７集

市内遺跡 1

2013. 3. 29

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　株式会社　昭和堂